

立山町文化財調査報告書第9冊

吉峰遺跡

——第6次発掘調査概要——

1989年

立山町教育委員会

序

文化財は祖先の営みを物語ってくれるもので、過去のみならず現在の文化を理解するためにも重要なものであります。中でも埋蔵文化財はその土地に深く関係しており、郷土をよりよく知るための鍵となるものです。

このたび調査の行われた吉峰遺跡は、過去の調査で旧石器時代から縄文時代にかけての資料が大量に出土しており、特に縄文時代前期には北陸有数の大規模な集落が営まれた遺跡として知られていました。

今回の調査でも、多量の土器・石器と共に、県内最古と考えられる大型住居跡が検出され、縄文時代の生活を復元するための新たな鍵が与えられました。

この報告書がより多くの方々に活用され、地域の歴史と文化の理解に役立てば幸いです。

最後に、調査に際しご援助いただいた富山県埋蔵文化財センターをはじめ、調査にご協力いただいた地元や諸方の皆様に衷心より感謝いたします。

1989年 3月

立山町教育委員会

教育長 坂井市郎

例 言

1. 本書は、昭和63年度に国庫補助金及び県費補助金の交付をうけて実施した、富山県中新川郡立山町吉峰遺跡緊急発掘調査の概要である。
2. 調査期間は、昭和63年5月16日～9月27日までの延66日である。発掘面積は約2,000㎡である。
調査期間中は、地権者をはじめ地元の方々から、御協力・御理解を得た。記して謝意を表します。
3. 調査事務局は立山町教育委員会におき、社会教育課主事森秀典が事務を担当、社会教育課長松井哲男が総括した。
4. 調査担当者は、立山町教育委員会社会教育課主事森秀典・北川美佐子（臨時調査員）である。
5. 調査から報告書の作成に至るまで、下記の方々から有益な御教示を得た。記して感謝の意を表します。
奈良大学助教授泉拓良、富山大学教授小林武彦、狩野睦・山本正敏・神保孝造・酒井重洋（以上富山県埋蔵文化財センター）、魚津市教育委員会学芸員麻柄一志（順不同・敬称略）
6. 遺物整理・実測・製図は、森・北川が中心となり、沢辺利明・春日真実（富山大学学生）が、協力した。
7. 本書の編集・執筆は、森・北川が担当し、執筆分担は各文末に記した。

目 次

挿 図 目 次

I 遺跡の位置と周辺の遺跡…………… 1	第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡…………… 1
II 調査に至る経緯…………… 2	表1 調査結果一覧…………… 2
III 調査の概要…………… 4	第2図 地形と区割図…………… 3
1 立地と層序…………… 4	第3図 遺構全体図…………… 4
2 遺構…………… 6	第4図 遺構実測図…………… 5
3 遺物…………… 9	第5図 遺構実測図…………… 6
(1) 土器…………… 9	第6図 遺構実測図…………… 7
(2) 石器…………… 17	第7図 遺物実測図…………… 11
IV まとめ…………… 23	第8図 遺物実測図…………… 12
註・参考文献	第9図 遺物実測図…………… 13
写真図版	第10図 遺物実測図…………… 14
	第11図 遺物実測図…………… 15
	第12図 遺物実測図…………… 16
	第13図 遺物実測図…………… 18
	第14図 遺物実測図…………… 19
	第15図 遺物実測図…………… 20
	第16図 遺物実測図…………… 21
	第17図 遺物実測図…………… 22

I 遺跡の位置と周辺の遺跡

立山町は富山県の東南部に位置し、立山連峰に源を発する常願寺川によって形成された、広大な扇状地上に拓けた町である。西は富山市、東は長野県に接し、東西約43km、南北約21km、面積は308km²を測る。

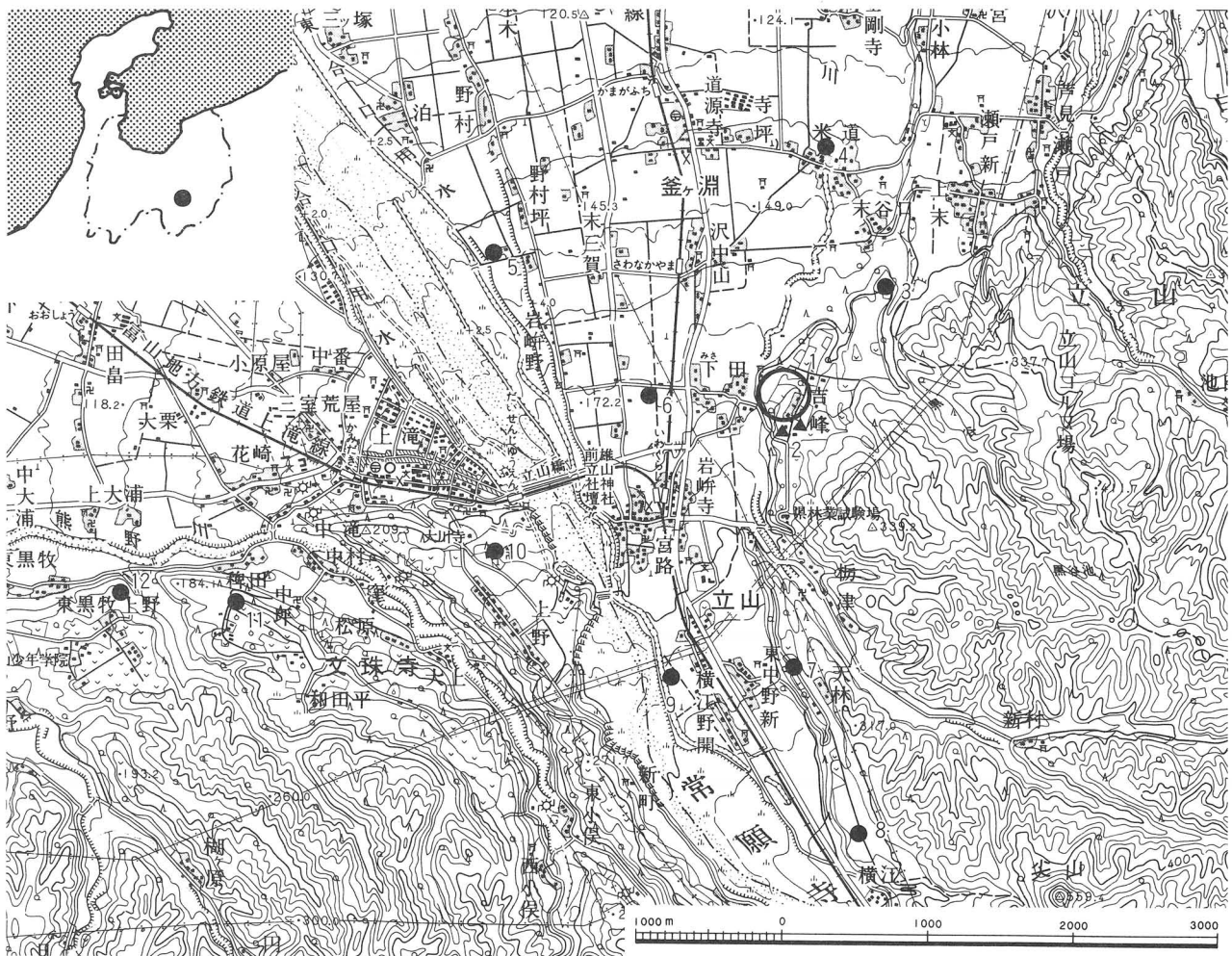
地勢は、三角洲や扇状地・河岸段丘・丘陵・溶岩台地さらに山岳高地におよぶ多様な地形が、標高約10mから3,000mにかけて展開している。

このような地形の中で、吉峰遺跡は扇頂部に近接した高位段丘上に位置し、今回の調査区は標高約215mを測る。遺跡からの眺めはすばらしく、西方には富山平野を一望して遠く白山までが、北方には富山湾をこえて能登半島までが、そして東方には北アルプスの3,000m級の山々が望まれる。

周辺には、旧石器時代から近世にまで至る多数の遺跡が存在するが、特に一帯の段丘上は県内有数の縄文時代遺跡の宝庫となっている。

これらの遺跡の中で吉峰遺跡に関連があるものとしては、天林南（縄文時代早～晩期）・天林北（縄文時代前～晩期）・吉峰祭祀（平安時代）・末谷口（縄文時代中期）の各遺跡が高位段丘上にあり、一段低い段丘上には岩峠野（縄文時代中～後期）・横江中ノ林（縄文時代後期）の各遺跡が、さらに一段低い段丘上には末三賀中諸見坂遺跡（縄文時代中期）がある。また、常願寺川対岸の段丘上にも東黒牧（縄文時代）・文珠寺稗田（縄文時代中期）・大川寺（縄文時代中期）の各遺跡がある。

（森）



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

- | | | | | |
|-------------|-----------|----------|------------|--------------|
| 1. 吉峰遺跡 | 2. 吉峰祭祀遺跡 | 3. 末谷口遺跡 | 4. 米道福地田遺跡 | 5. 末三賀中諸見坂遺跡 |
| 6. 岩峠野遺跡 | 7. 天林北遺跡 | 8. 天林南遺跡 | 9. 横江中ノ林遺跡 | 10. 大川寺遺跡 |
| 11. 文珠寺稗田遺跡 | 12. 東黒牧遺跡 | | | |

II 調査に至る経緯

吉峰遺跡が立地する河岸段丘上の小丘は、かつてはアカマツ・コナラを主体とする二次的植生の雑木林であった。^{註1} 当地に開拓民の入植が始まったのは、第二次大戦後であった。以後、丘陵上は開墾によって畑地化が進められ、縄文時代前期の遺物を採集できる地として、県内における該期の著名な遺跡の一つとなっていった。

しかし、地域開発事業の進行に伴って、河岸段丘上の良質な土砂が注目され、各地で土取り事業が行われるようになった。当遺跡地も良質な赤土を産し、土取り事業の対象地となった。そのため、事業に先立ち、昭和44年に富山県教育委員会が主体となり、発掘調査を行った。

昭和44・45年度調査（第1・2次）調査は、遺跡の範囲の北部と中央部において、一辺2mの方形トレンチを入れ、遺跡の規模・層序・遺構の確認を目的として行われた。この結果、層序の概要・縄文時代早期の炉跡・同前期の住居跡4棟の存在が確認された。

その後、吉峰部落の中で土取り後水田化したいという意向が高まり、土取りが急速に進められ、以後事業の進行に伴い、3回の緊急発掘調査が行われた。

昭和48年度調査（第3次）調査は、遺跡中央部北寄り、発掘面積約2,520㎡に及ぶ全面発掘調査であった。この結果、縄文時代前期中～後葉の住居跡が8棟検出された。

昭和49年度調査（第4次）調査は、丘陵のほぼ中央部、第3次調査の南にあたり、発掘面積は約3,200㎡。縄文時代前期中葉～中期初頭の住居跡8棟が8棟検出された。

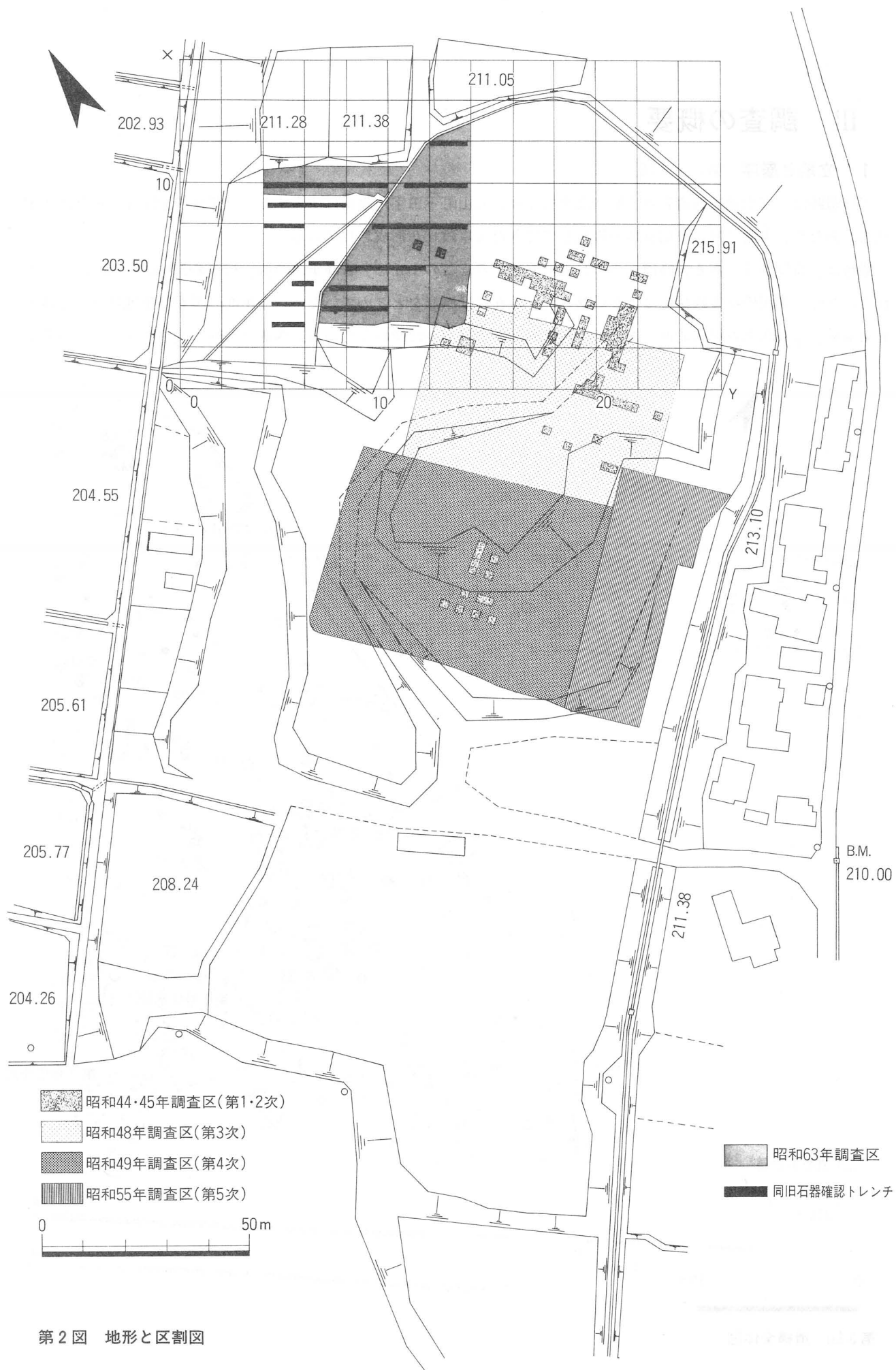
昭和55年度調査（第5次）第4次調査の東にあたり、発掘面積は約1,100㎡。

以上の調査によって、吉峰遺跡は、縄文時代前期の集落のあり方を知る上で貴重な資料となったが、これらの調査区域は、現在では基盤から消失してしまっている。

昭和63年度調査（第6次）昭和62年秋、土取り業者から、遺跡当該地での土取り事業の申請がなされた。このため富山県教育委員会・立山町教育委員会・工事主体者の三者で協議の上、土取り事業が行われる範囲を対象として、立山町教育委員会が調査主体となり、国庫補助を受けて記録保存調査を実施することとなった。尚、調査は3ヶ年計画で実施することとなり、今回の調査は西側部分約2,000㎡である。

調査年度	発掘面積	調査期間	調査の概要	
			遺構	遺物
昭和44年第1次	約382㎡	11月16日～12月1日	縄文時代前期の住居跡3 縄文時代前期の炉跡1	縄文時代早期～中期中葉・晩期の土器、石器
昭和45年第2次		3月10日～3月31日	縄文時代早期の炉跡1 縄文時代前期の住居跡1	先土器時代のナイフ形石器2・両面加工のポイント1・エンドスクレパー1・ドリル1 縄文時代早期～中期・晩期の土器、石器
昭和48年第3次	約2,520㎡	8月6日～9月18日	縄文時代前期中葉の住居跡6 縄文時代前期後葉の住居跡2 穴20	縄文時代前期中葉・後葉の土器 石器
昭和49年第4次	約3,200㎡	6月3日～11月2日	縄文時代前期中葉の住居跡1 縄文時代前期後葉の住居跡6 縄文時代中期初頭の住居跡1 縄文時代中期初頭の埋葬1 穴81	先土器時代の削器2・先刃型搔器1・他3 縄文時代早期～中期後葉の土器 縄文時代中期初頭以前の板状の土製品 縄文時代前期初頭の土板(メンコ) 石器
昭和55年第5次	約1,100㎡	8月27日～9月9日	穴5	縄文時代早期～晩期の土器 石器
昭和63年第6次	約2,000㎡	5月16日～9月27日	縄文時代前期中葉の住居跡2 穴255	縄文時代早期～中期初頭・後・晩期の土器・石器、平安時代の須恵器・土師器

表1 調査結果一覧



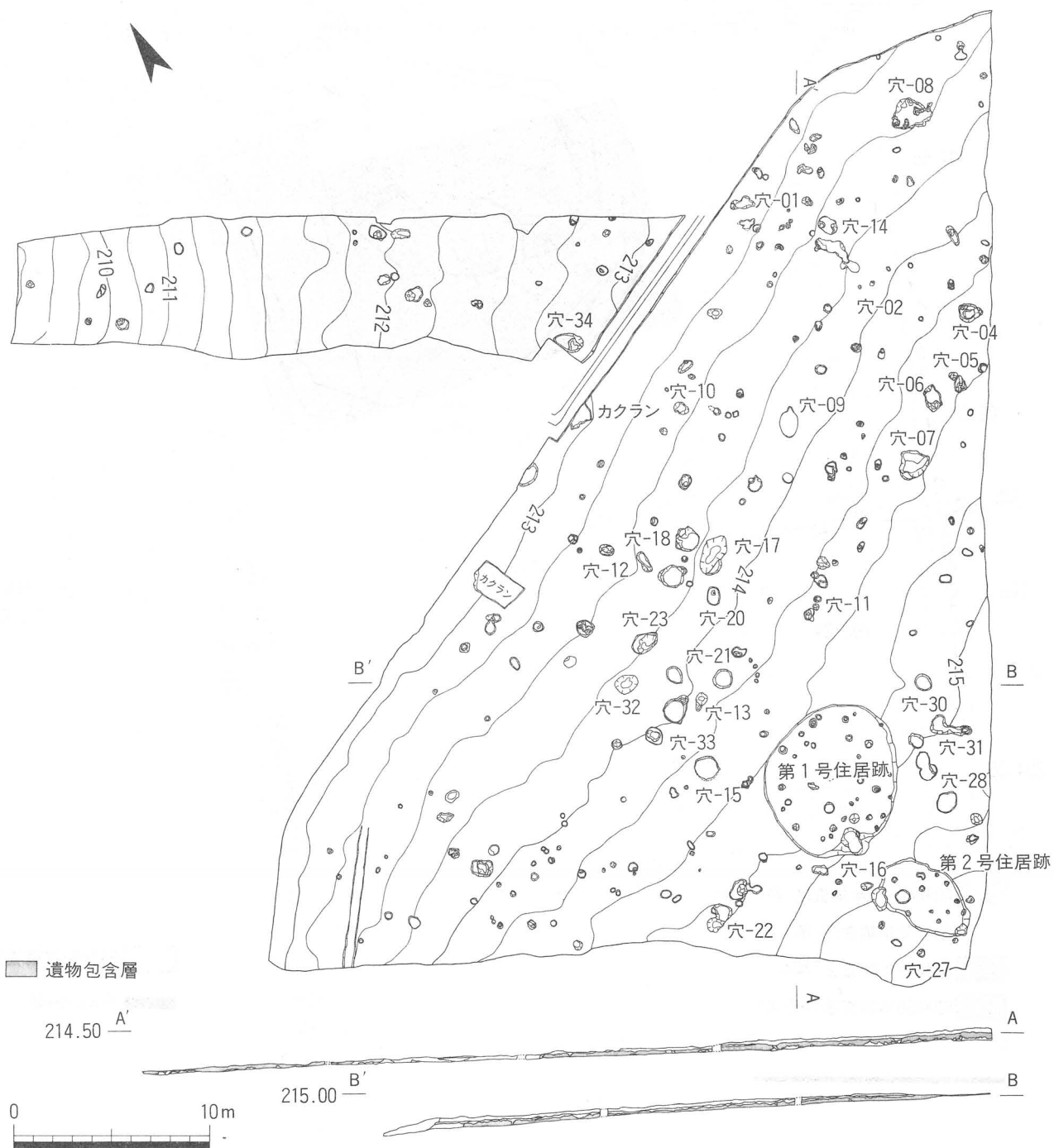
第2図 地形と区割図

III 調査の概要

1 立地と層序 (第2・3図)

吉峰遺跡は、富山地方鉄道岩嶺寺駅の北東約1km、立山町下田字川除山に所在する。一帯は、常願寺川扇状地の扇頂部にあたり、東側には、旧扇状地が隆起してできた河岸段丘が形成されている。

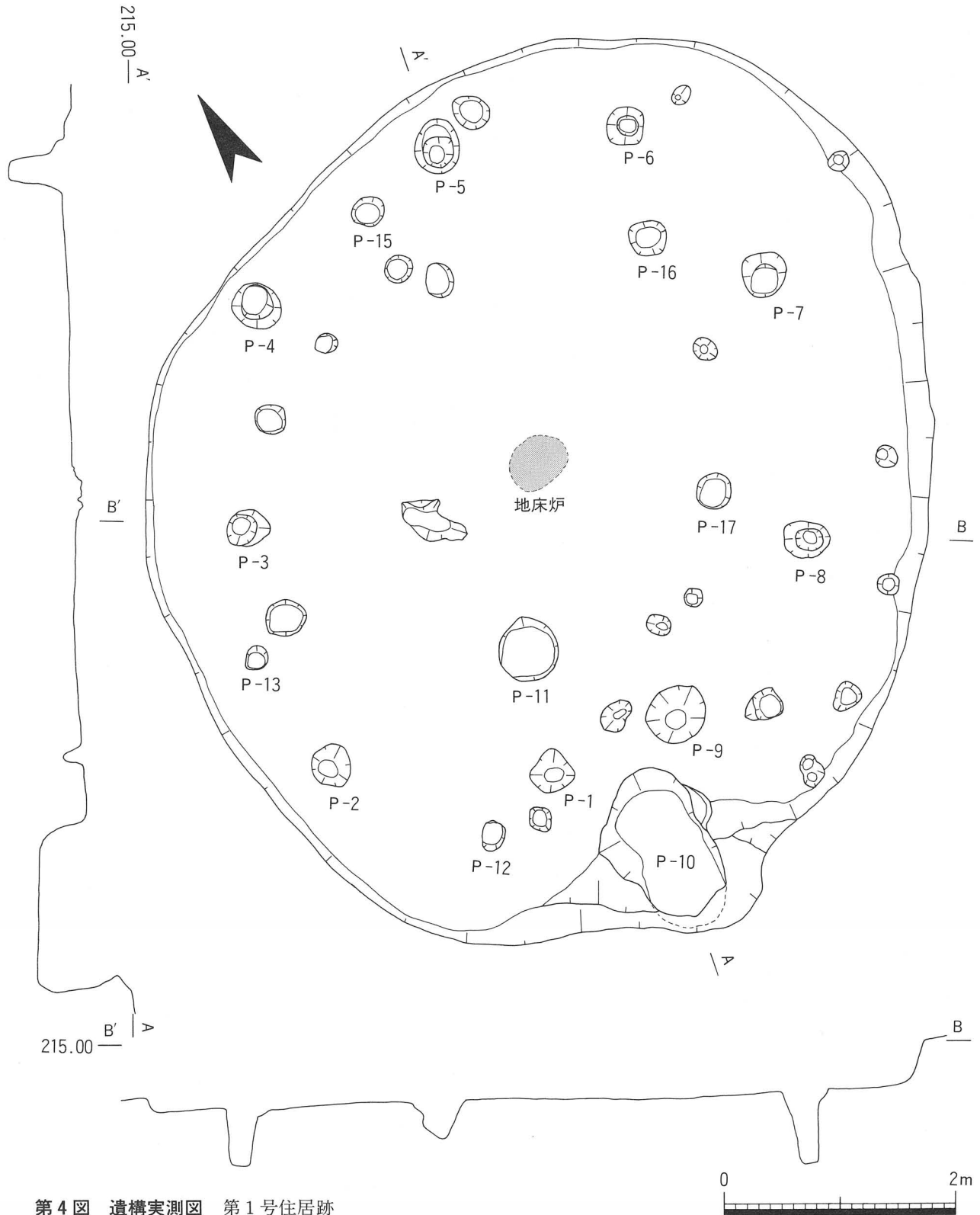
遺跡は、高位段丘である吉峰段丘の小丘上に立地する。この小丘は、吉峰集落の西、標高約230m、川除山と呼ばれていたが、大規模な土砂採掘により破壊され、現在では原形をとどめていない。今年度の調査対象地区は、丘陵の北東端部、第3次調査区の北西にあたり、西に向かって緩やかに傾斜している。西側は、既に削平を受け、地山面が



第3図 遺構全体図

露出し、南・東側には、表土除去作業による小山状の盛土が見られた。中央部は、畑地として利用されていた。

層序は、第1層・茶褐色土（約20cm）、第2層・暗茶褐色土（約20cm）、第3層・黄褐色粘土層（地山）となっており、第2層が遺物包含層である。調査区北側は、耕作等により攪乱・削平を受け、表土から地山面まで約20cmと浅く、部分的に焼土・炭化物の混入を見る。南側は、遺存状況が良く、第1・2層の間に約5～10cmの橙色の強い茶褐色土の堆積が見られる。遺物は、X4・5Y12～14付近で比較的多くの出土を見たが、他は概して少ない。



第4図 遺構実測図 第1号住居跡

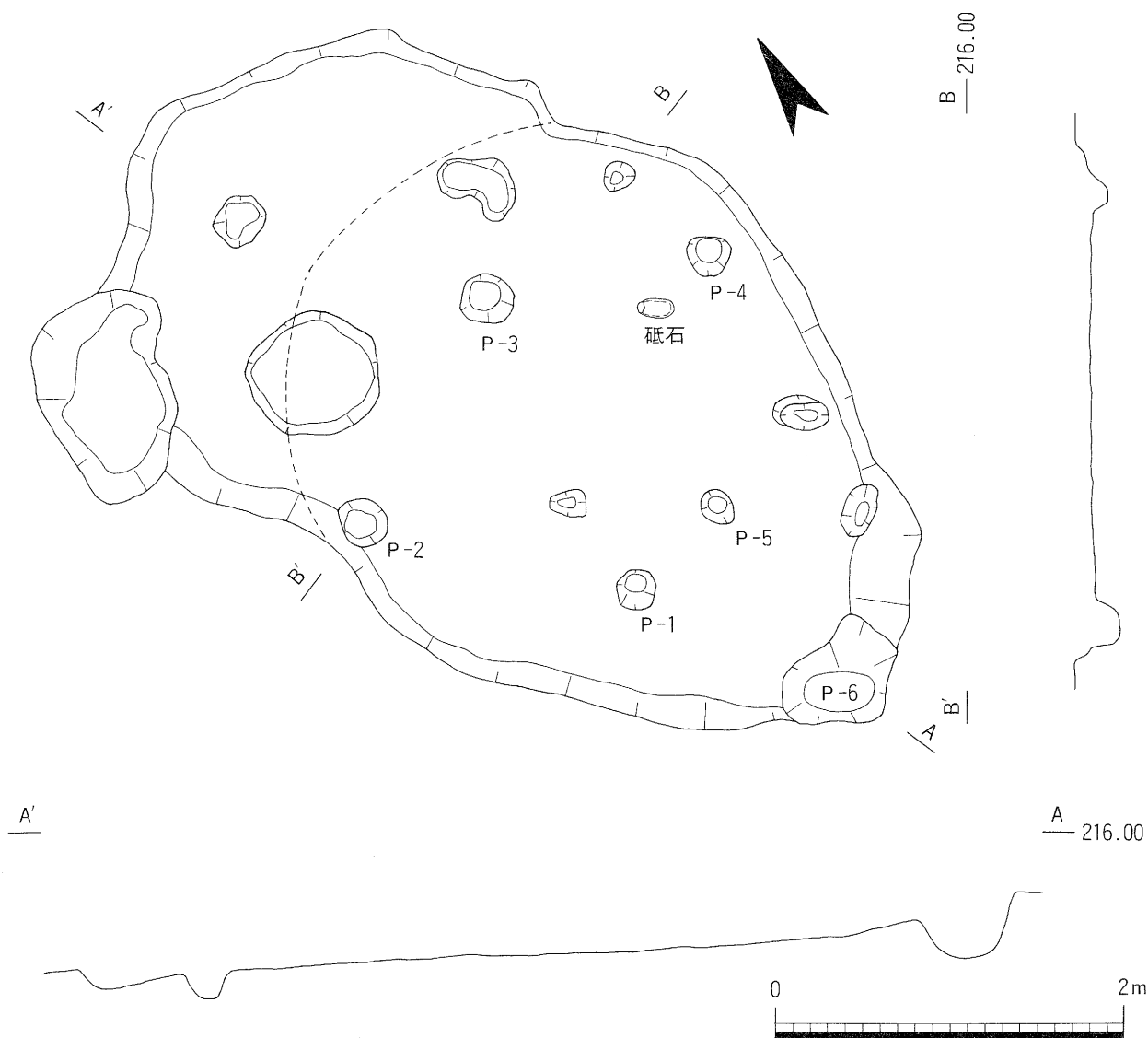
2 遺構 (第3図)

検出した遺構は、縄文時代前期中葉の竪穴住居跡2、穴255である。

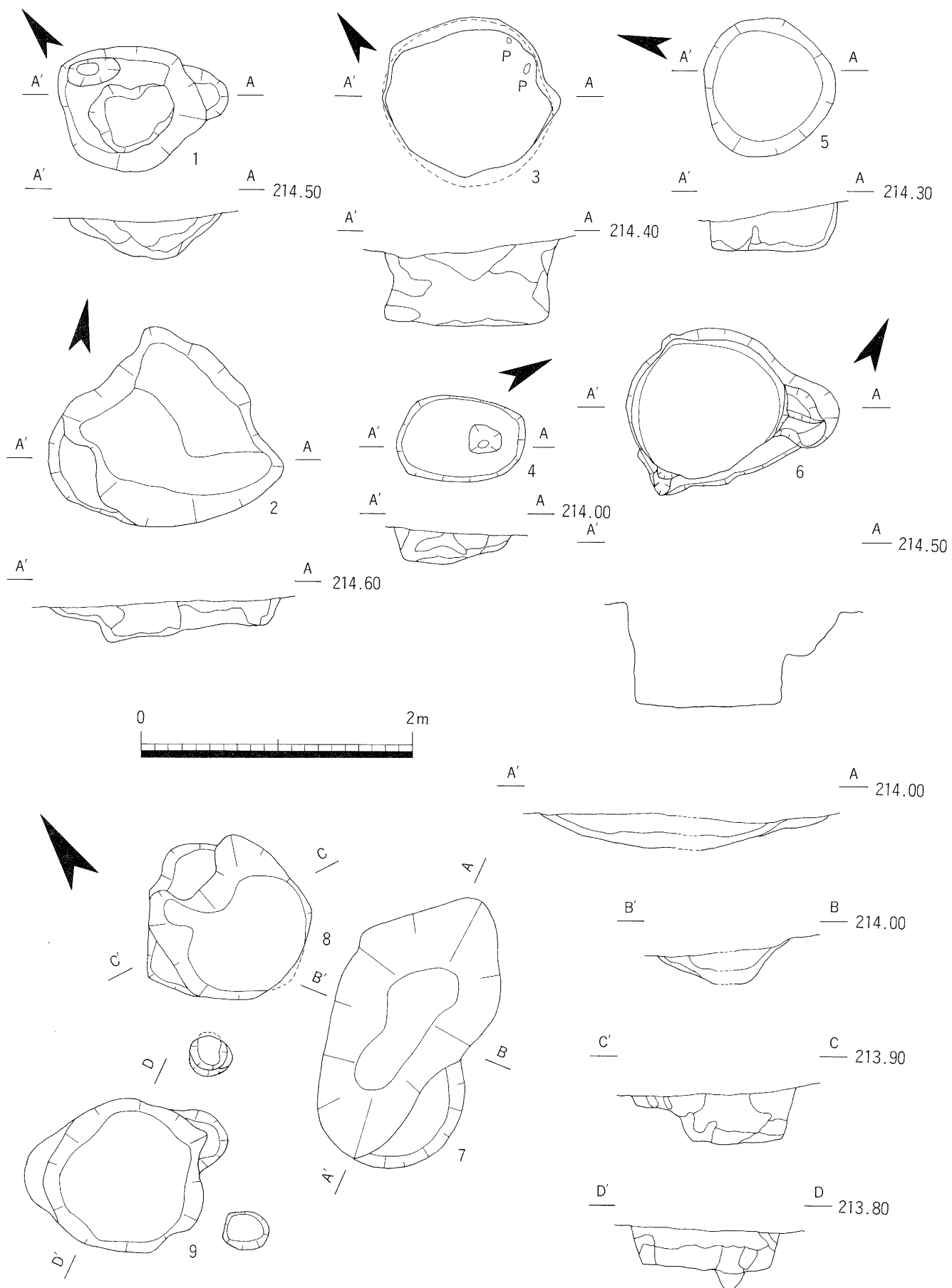
第1号住居跡 (第4図) 標高が約215m、X5・6Y12・13付近に位置する。規模は、長軸約7.6m、短軸約6.8mの不整形円形プランである。覆土は、住居跡東半に黒味の強い暗茶褐色土の堆積が見られ、西に行くに従い茶褐色土となり、黄褐色土(地山層)との識別は不明瞭となる。壁は、東側の壁高が約35~40cmと高く、立ち上がりがしっかりしているが、北・西側は約5~10cmと低く、立ち上がりもあまい。

床面は、平坦で、全体的に北に向かって若干傾斜している。床面上では、計35個の穴を検出した。この内、掘り方の形状などからP-1~9が、支柱穴を構成する。P-5は、住居跡の主軸N-12°-Eの方位上にあり、柱列は9本支柱XY型となる。各支柱穴は、直径約40~50cmの掘り方を持ち、床面から約40~70cm掘り込まれている。P-12~17は、深さ約11~32cmと浅いものの、柱穴としての可能性があり、P-9を重複使用とみなせば、7本支柱XY型の柱列となり得る。2組の柱列の関係については、覆土などからは把握し得なかった。

柱穴以外の穴としては、住居跡主軸上南端に、約1.4m×約0.7mの隅円長方形のP-10がある。壁が底部で袋状となり、深さは約40cm、底面は平坦である。覆土は、黄褐色粘土粒が霜降り状に混じった、黒味の強い暗茶褐色土で、多量の炭化粒が混入していた。中からは、土器片・擦痕を有する蛇紋岩の小剥片・二次加工のある珪化凝灰岩の剥片



第5図 遺構実測図 第2号住居跡



第6图 遺構実測図 1.穴-04 2.穴-07 3.穴-15 4.穴-20 5.穴-21 6.穴-33 7.穴-17 8.穴-18 9.穴-19

が出土している。穴の覆土中の土器片の中には、住居跡覆土出土のものと同一体のものがあり、P-10は、住居跡に付属するものとみなされる。P-11は、直径約50cm、深さ約30mの円形の穴で、掘り方がしっかりしており、貯蔵穴の可能性も考えられたが、遺物は出土しなかった。

住居跡の炉は、住居跡の主軸上、ほぼ中央に位置する。直径約50cmの地床炉である。焼土の遺存状況は良い。

遺物は、縄文時代早期末～同前期後葉のものが出土しているが、小破片がほとんどで、量も少なく、散発的な出土にとどまる。量的に主体を成すものは、前期中葉のもので、住居跡の時期も当期と考える。

第2号住居跡（第5図）X4・5Y14付近、第1号住居跡の南東約3mに近接する。当初、長軸約5.4m、短軸約3.2mの楕円形プランを検出したが、土層断面から、北端部約1mの範囲は攪乱と判明した。最終的には、長軸約4.1m、短軸約3.2mの不整円形プランとなった。住居跡の主軸は、N-18°-Wの方位をとる。覆土は、炭化物の混じった暗茶褐色土が主体を成す。壁は、壁高が約8～18cmと低いが、立ち上がりはしっかりしている。

床面は、平坦で、緩やかに北に向かって傾斜する。床面上では、計11個の穴を検出し、P-1～5が主柱穴となる可能性が高い。P-3が主軸よりやや東にふれるが、5本主柱XY型となるであろう。

柱穴以外の穴には、住居跡南端に、約75cm×約50cmの楕円形を呈するP-6がある。断面は播鉢状で、床面より約20cm掘り込む。覆土は、住居跡覆土より黒味が強い黒褐色土が堆積する。遺物は、土器が1点出土したにとどまる。

住居跡の炉は、床面を精査したが、検出できなかった。住居跡覆土中の遺物は、非常に少ない。土器は、縄文時代前期前葉～後葉のものが出土しているが、全て小破片である。表面に縄文を施し、繊維を含むものが多い。石器は、磨製石斧の刃部一点と、床面中央東寄りに、約22cm×約14cmの楕円形の砥石が出土している。

時期は、遺物・プランの形状などから、縄文時代前期前葉～中葉に位置づけられよう。

穴（第3・6図）穴は、255個検出したが、遺物の出土を見たのは18個にすぎない。時期は、縄文時代前期前葉～中葉の穴と、平安時代の穴に分けられる。

縄文時代前期前葉～中葉の遺物が出土した穴は16個である。炭化物を含む暗茶褐色土の覆土で、1～4点の土器片の出土が見られた。多くが含繊維土器で、器面に縄文を施している。掘り方の形状としては、播鉢状に掘られた穴（穴-04）、円形で約30～40cm掘り込む穴（穴-18～21など）、底部で袋状になる穴（穴-15・33）などがある。穴-15は、いわゆる袋状ピットと呼ばれている穴で、底部上面には、焼土と炭化物が密に堆積しており、貯蔵穴と考えられる。穴-17は、長軸約2.1m、短軸約1.1mの長楕円形を呈し、中央に炭化粒を含んだ赤味の強い茶褐色土、その周囲と下層に炭化粒を含んだ暗茶褐色土が堆積していたが、何ら遺物は出土しなかった。

これらの多くは、調査区中央に位置し、特に直径約1mの大きさの穴は、X6～8Y11・12付近に集中する。

平安時代の遺物を出土したのは、穴-01のみである。橙色を呈する、内外面ロクロナテ調整の甕体部破片である。覆土には、炭化物・焼土が多い。遺物は出土しなかったものの、同じような覆土の穴は、調査区北半に多く分布する（穴-03・14など）。当遺跡南約600mには、吉峰祭祀遺跡^{at3}（平安時代末）があり、それとの関連も考えられる。

吉峰遺跡においては、過去5回の調査で縄文時代の竪穴住居跡が合計20棟検出されている。その内、前期中葉に位置付けられたのは7棟ある。これらの特徴をあげると、1)平面形は、円形・楕円形・方形、2)柱穴は壁に沿って巡り、主柱は5～9本が基本、3)炉は地床炉、4)住居跡の南隅に穴を設ける。今回検出した第1号・第2号住居跡は、共にこの特徴を備えている。ただ、第1号住居跡は、9本主柱円形XY型であるが、今まで検出された円形・楕円形の住居跡が直径約4～5mの規模であるのに対し、約8m×約7mの不整円形と、2倍近くの大きさである。又、南隅に設けられた穴が袋状を呈しており、後出的な感もある^{at4}。しかし、前期後葉以降に属する遺物は、覆土からは1点しか出土していない。従って、前期中葉の住居跡の一形態として捉えても大過ないであろう。富山県内では、大型住居跡の範疇に入るものは、中期から出現する。第1号住居跡は、前期中葉の円形の住居跡としては最大規模となる。（北川）

3 遺物

遺物の大半は遺物包含層及び盛土（第3次発掘調査の契機となった、除去された表土）から出土しており、遺構から良好な状態で検出し得た個体は少ない。

遺物中、最も数量が多いのは縄文時代前期のもので、他に縄文時代早期・後～晩期、平安時代に属する資料がある。

(1) 土器

早期（第8図1） 文様は棒状具による浅い沈線文と貝殻腹縁文によって構成されており、胎土には植物繊維を含んでいる。田戸上層系の土器と考えられる。

早期末～前期前葉（第7図1～6、第8図2～19） 佐波式から極楽寺式にかけての時期のもので、全個体に植物繊維を含んでいる。

第7図1、第8図16は貝殻腹縁文及び条痕文を施すものである。第7図2・3、第8図2～13・17・18は貝殻腹縁等による条痕文を施すもので、第8図4・5・18は内面にも条痕文を施しており、第8図17は口縁端部に棒状具による連続押圧を施し、内面にドングリ様の圧痕を持つ。第7図4・5は棒状具による綾杉文と平行沈線文を施文するものである。第7図6、第8図14・15は縄文を施す厚手の胴部破片で、14・15は横位羽状縄文を施し、特に14は口縁端部に刻みを有する。第8図19は尖底部で、焼成前に穿孔している。

前期中葉（第7図7～9・12・13・17、第8図20～30、第9図） 朝日C式から蜆ヶ森式にかけての時期のものであるが、細隆起線文と羽状縄文で施文される典型的な蜆ヶ森II式土器は見られない。

第8図20は風化が著しいが、口縁沿いに連続爪形文を施し胎土には繊維を含む。朝日C式に属すると考えられる。

第7図12・13、第8図21～30は浮線文で施文する一群である。第7図12は浮線上に爪形文を施し入組文を描いており、諸磯a式に関連性が求められる。第7図13は口縁端部を細かい波状に整形しており、第8図21～27はハシゴ状文を描くなど、北白川下層II b～c式の強い影響が認められる。

第7図7～9、第9図1～8は連続爪形文で施文する一群である。第9図1は特異な土器で、D字形爪形文を施し爪形文の間には長い斜め刻みを連続して施す。また胎土に多量の雲母を含んでおり、搬入品と考えられる。第7図7・8、第9図2～4はC字形II型爪形文を用いるもので北白川下層II b式に関連性が求められる。第7図9、第9図5～8は平行沈線間に爪形文（C字形II型）を施文しており、やや後出的な様相を示している。

第9図9～16は円形刺突文、平行沈線文、爪形文で木の葉文、入組文を施文する一群で、諸磯a式に関連性が求められる。特に16は爪形文で入組文を描き、外面を赤彩している。

第7図17、第9図18・19は羽状縄文を施文する一群である。いずれも口縁端部を細かい波状に整形しており、また第9図18は3条撚りの縄文を用いるなど、北白川下層II b式に関連性が求められる。

第9図20～28は口縁端部を指又は棒状具で細かい波状に整形し、口縁部以下には右下がりの斜行縄文を施文する一群で、土着的土器とされている。20～22は波状に整形するだけだが、23～28では波状に沿って連続刺突し、粘土紐を貼付したかのような効果をもたせている。縄文はRLが多く、21・28のような撚りのゆるいものが目立つ。

第9図29は口縁端部に綾杉状の刻みを施し、左下がりの斜行縄文（RL）を施文する。やはり撚りのゆるい原体によって施文されており、前述の土着的一群と同時期のものと考えられる。

前期後葉前半（第10図） 福浦上層式に比定できる土器群である。

1～3は縄文地上にやや太めの粘土紐を貼付する一群である。

4～7、9～12は鋸歯状印刻文を施文する一群で、4～7は結節状浮線文と、9～12は半隆起線文と組んで施文している。また、10には耳状の、4・5には粘土帯を貼付した突起が見られる。

8は口縁部に耳状及び粘土帯貼付の突起を持つため同時期におく。

13～20は半隆起線文と凹線文で円・直線文様を施文する胴部破片である。

21～24は無文の口縁部に結節状浮線文で施文する一群で、24には半隆起線も用いている。21は結節状浮線文が他に比べてきわめて細く間隔も広く、コブ状の突起を持つことなどから、時期がやや古くなる可能性もある。なお、22の口縁部は粘土紐を貼付した後外側へつまみ出した形状となっており、23・24ではさらに指で内側へ連続押圧してさざ波状に整形している。

25～33は縄文地の上に結節状浮線文を施文する一群である。文様は前述の無文帯に施文されるものに比べて曲線的に入り組んだものになり、口縁部形態にも粘土紐を1条貼付するもの⁽²⁸⁾、粘土紐を波状に貼付するもの⁽²⁹⁾などが見られる。

前期後葉後半（第7図14、第11図1～9・11） 朝日下層式に比定できる土器群である。

第11図1は波状口縁深鉢の円筒状をなす波頂部である。結節状浮線文で施文される点や形状から、能登の真脇式⁽³⁰⁾の共通点が見られ、古い様相のものといえる。

第7図14は結節状浮線文といわゆるソーメン貼りで施文している。

第11図2～7はソーメン貼りで施文する一群である。

第11図9は器面を直接半截竹管で押し引きし、結節状浮線文の文様効果をもたせている。

第11図8・11は半隆起線文で施文した胴部破片である。11では口縁部と胴部の文様帯の境に太い隆帯を配し、その上に半截竹管で連続刺突を施している。

前期末～中期初頭（第7図10・11・15、第11図10） 朝日下層式から新保式にかけての時期のものである。

半隆起線文で施文する一群である。第7図11は半隆起線文と縄文の境に爪形の連続刺突を施している。

後期～晩期（第11図12～20、第12図） 第11図12～18、第12図1・2は後期後半に属すると考えられる一群である。

第11図13～15は縄文地に沈線で施文するもの、第11図12、第12図1・2は口縁部に斜行の、胴部には縦位の縄文を施文するもの、第11図18は口縁部を無文とし以下は縄文を施文するもので、それぞれ本江遺跡⁽³¹⁾のN類（N₂形）・O類・P類に相当する。

第11図16・17は胎土・焼成ともによく似ており、同一個体と考えられる。波状口縁をなし胴部で屈曲する深鉢と考えられる。全面に幅広沈線を施し、沈線間には隆帯のような効果をもたせ、その上には連続刺突を施している。井口II～III式期に属するものと考えられる。

第11図19は口縁部に斜めの連続刺突を施し、その下に幅広沈線をめぐらす。晩期後半に属するものと考えられる。

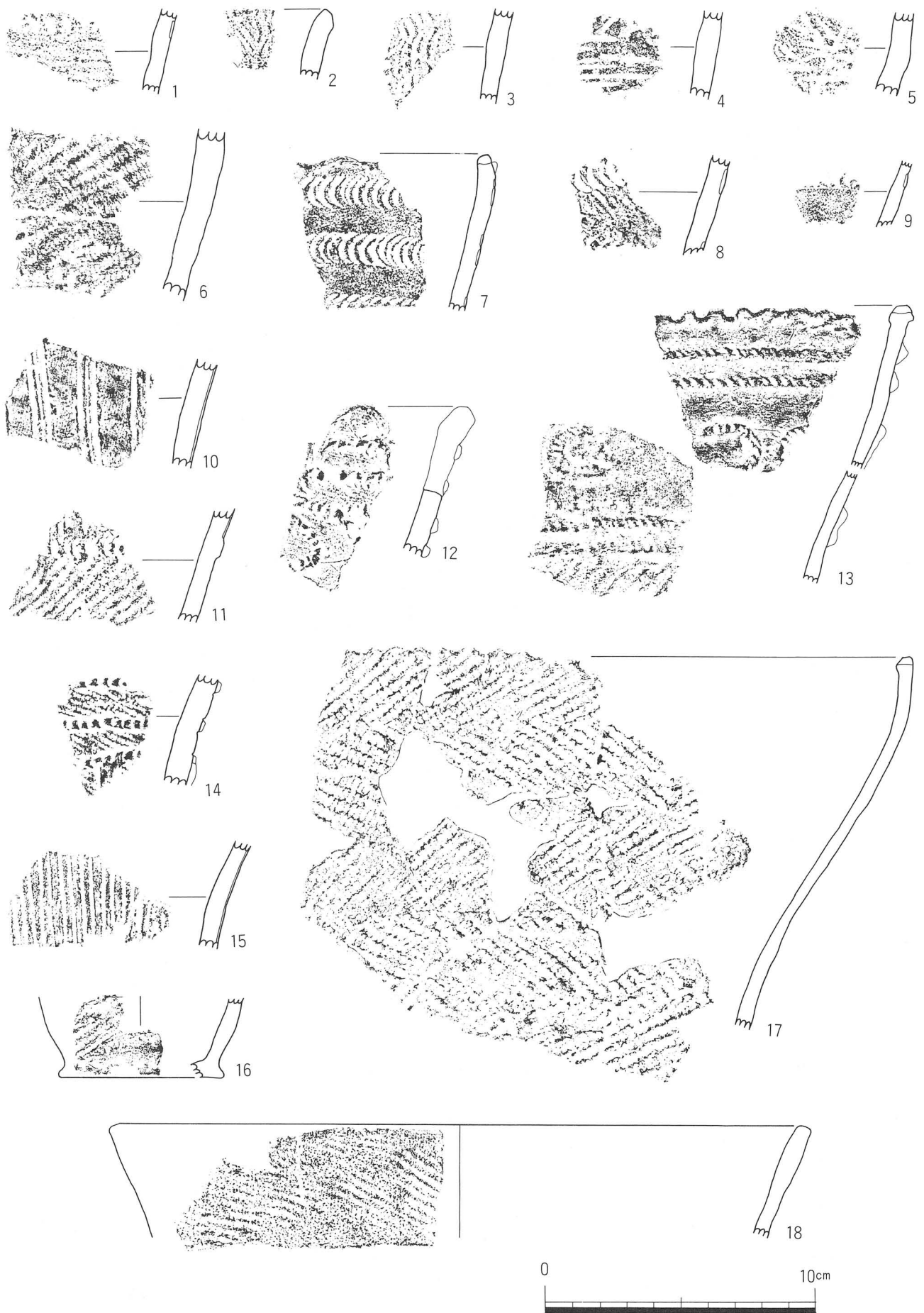
第11図20はわずかに内湾しながら開く器形の浅鉢で、丸底になるものと考えられる。口縁部には縄文を施文し、胴部とは沈線で区切る。内面と胴部外面はよく磨かれ、内面底部は段をつけて丸く凹ませる。口縁端部には突起を、沈線直上には小孔を、いずれも2個一対で施している。晩期後半に属するものと考えられる。

その他 図示出来なかったが、平安時代の土師器・須恵器が少量出土している。

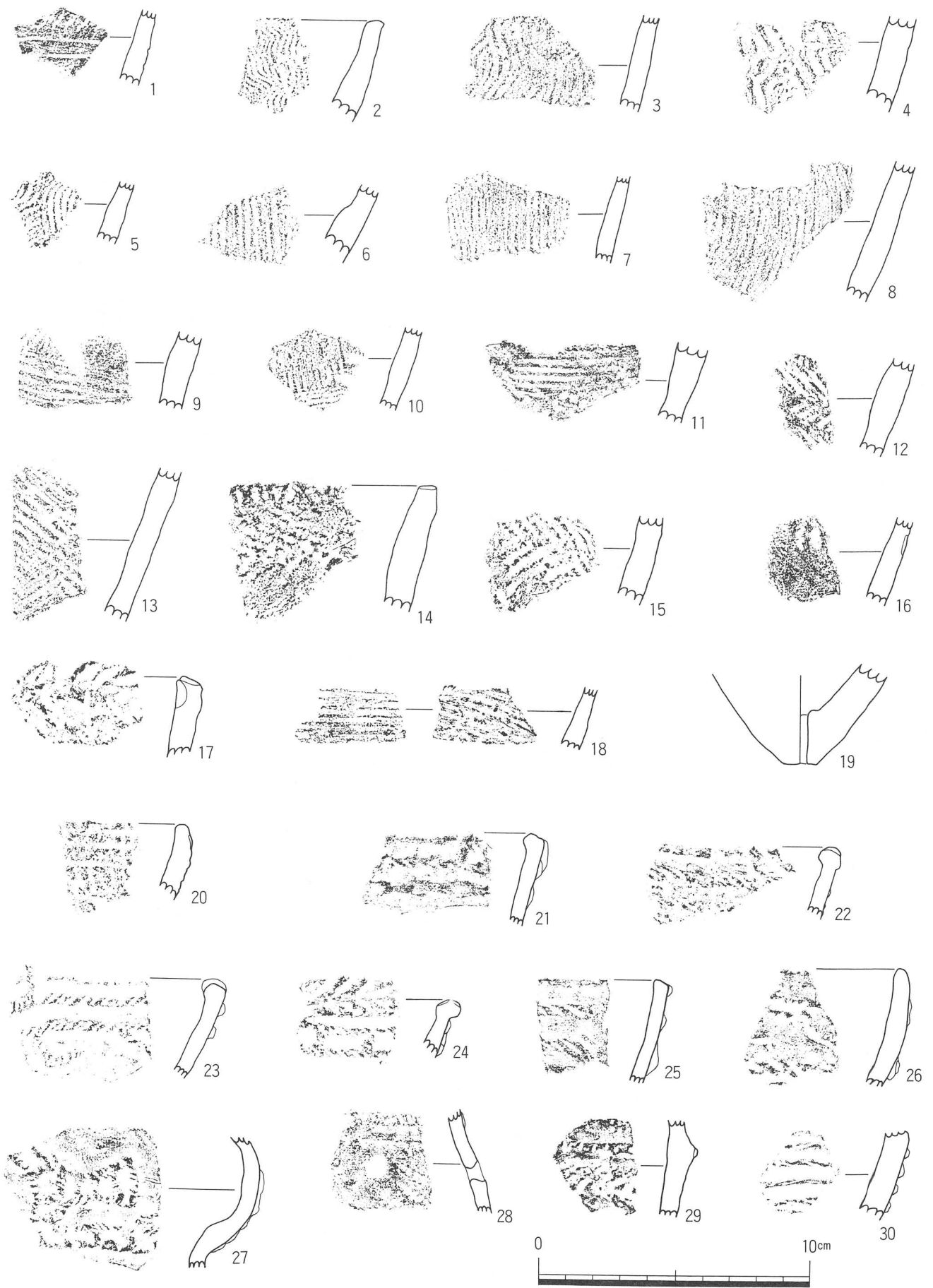
土師器は全て甕の破片である。いずれも薄手で、内外面ロクロナデ調整、胴部下半外面はヘラケズリ調整を施す。口縁部形態を知りうるものは一片のみで、受口状を呈する。

須恵器は糸切りの坏底部一片のみの出土である。

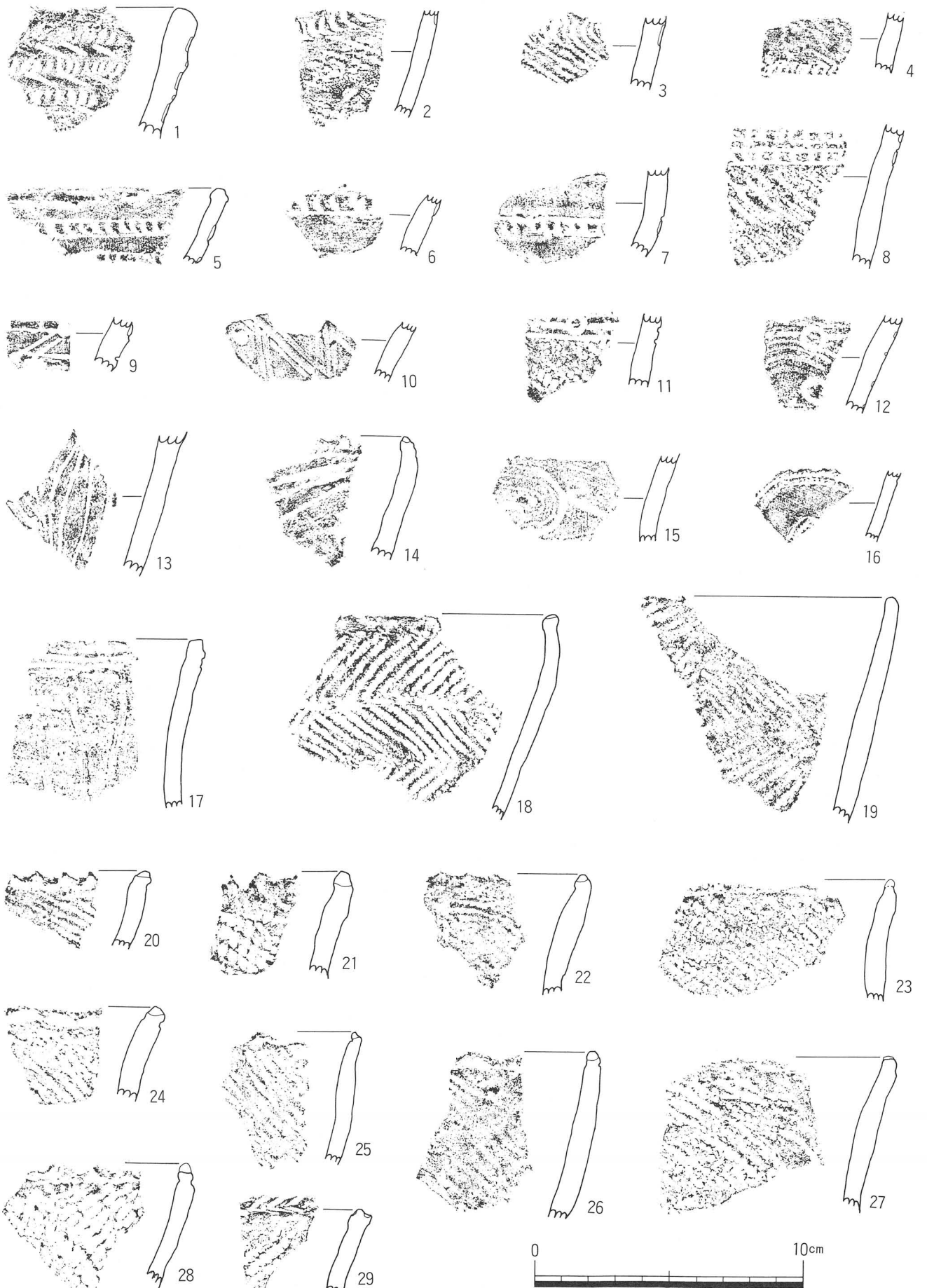
（森）



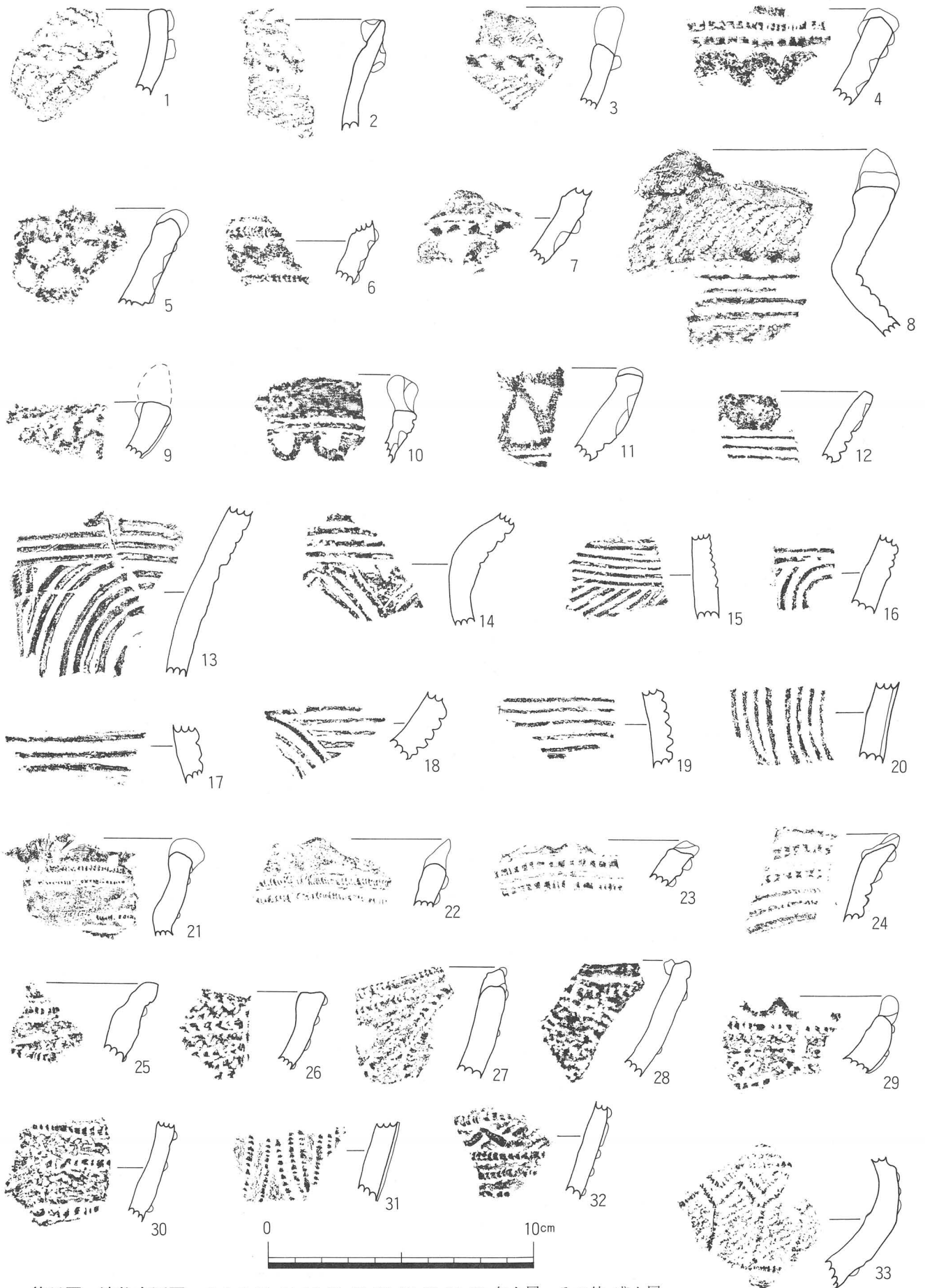
第7图 遺物実測図 1~8・10・12~14・16~18, 第1号住居跡 9・11・15, 第2号住居跡



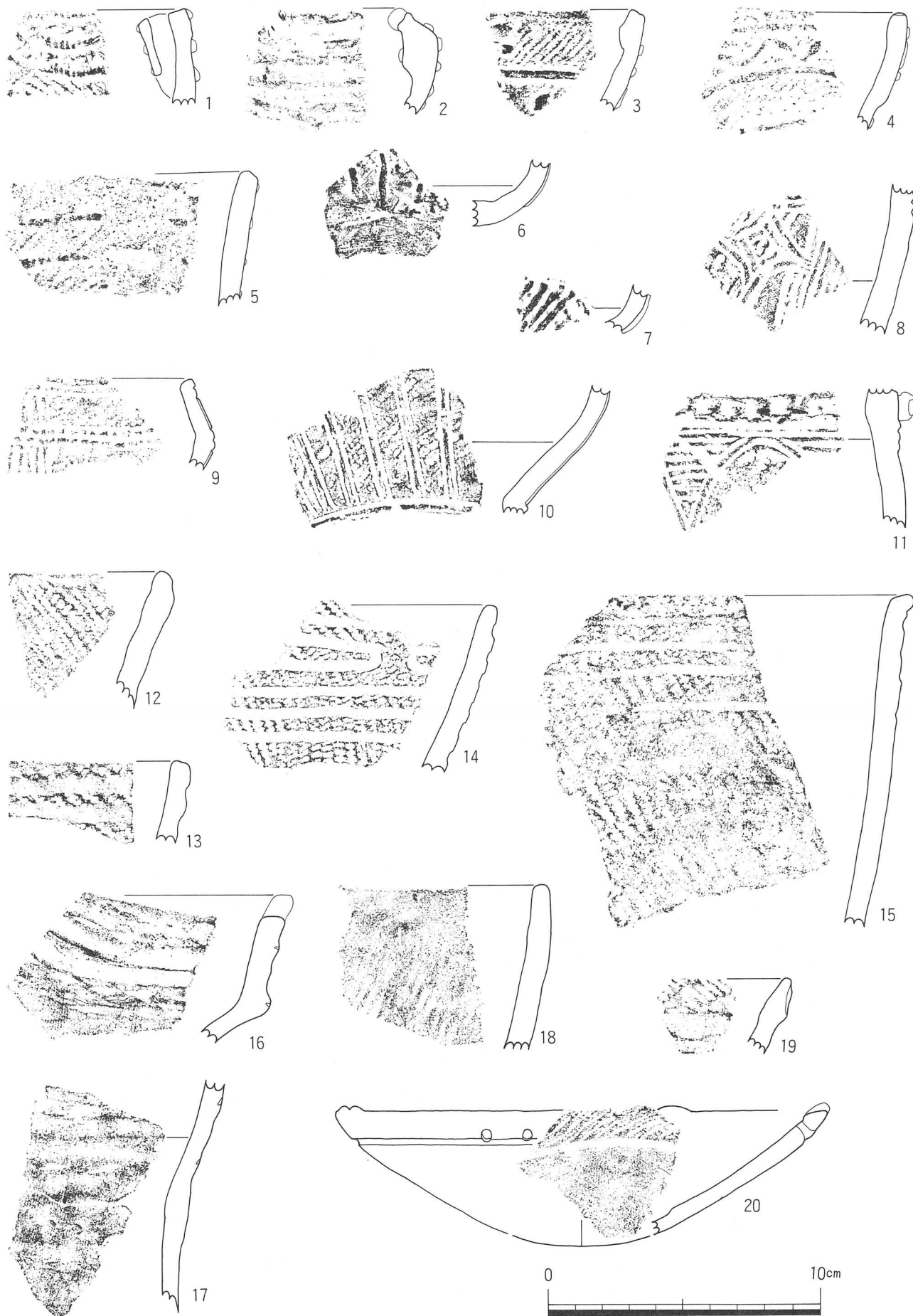
第8図 遺物実測図 4. 第1号住居跡 1・2・3・6・9・11・13~15・17・20・26・28・30, 包含層 5・18 表採 その他, 盛土層



第9図 遺物実測図 1・2・8・11~14・17・18・20~23・25・28・29, 包含層 その他, 盛土層



第10図 遺物実測図 2・7・8・12・14・16・20・23・25・27・29・30・32. 包含層 その他, 盛土層



第11図 遺物実測図 3・5・8・10・13~18・20, 包含層 19, 表採 その他, 盛土層



第12図 遺物実測図 1・2. 包含層

(2) 石器

出土した石器には、石鏃6・石匙5・石錐2・楔形石器2・削器2・二次加工のある剥片10・磨製石斧32・打製石斧16・凹石36・擦石12・敲石27・砥石7・石皿1・石ランプ7がある。その他黒曜石・鉄石英の剥片・石核がある。磨製石斧・凹石の比率が高い。遺物の大半は、包含層（暗茶褐色土）・盛土層からの出土である。

石鏃（第13図1～6）1は黒曜石製、U字形の大きな抉りをもつ鏃形鏃で、早期の特徴的な石鏃である^{註11}。2は、安山岩製の平基無茎鏃。3～5は、扶入の浅い凹基無茎鏃。石材は、3がチャート、4・5がハリ質安山岩である。4は未製品。3は、長さ1.92cm、重量0.6g。5は出土中最大で、長さ2.95cm、重量3.8gを測り、第1号住居跡上面より出土している。6は、珪化凝灰岩製で、石鏃の未製品と考えられ、第1号住居跡P-10より出土している。

石匙（第13図8～12）形態は、すべて三角形の横型である。刃部は、9～12が片刃状、8のみ両刃と思われる。石材は、玉髓・安山岩・チャート・珪化凝灰岩を使用する。9は珪化凝灰岩製で、長さ3.55cm、刃部幅4.55cmを測る。

石錐（第13図7）全体の形状が棒状をなすものと、つまみ状の頭部をもつものがある。7は黒曜石製で、長さ2.17cm、横断面菱形で、ほぼ全面に調整加工を施すが、側縁に一部未調整面を残す。

楔形石器（第13図17）石材は、鉄石英。17は上下端に剝離痕を有し、長さ4.61cm、最大幅3.11cm、四辺形状を呈する。この他に、^{註13} 截断面が観察できるものがある。

削器（第13図14・16）14は鉄石英製、三角形を呈し、2辺に各々相対する片面のみに剝離調整を施している。16は、一辺の片面のみに剝離調整を加え、刃部を作り出している。

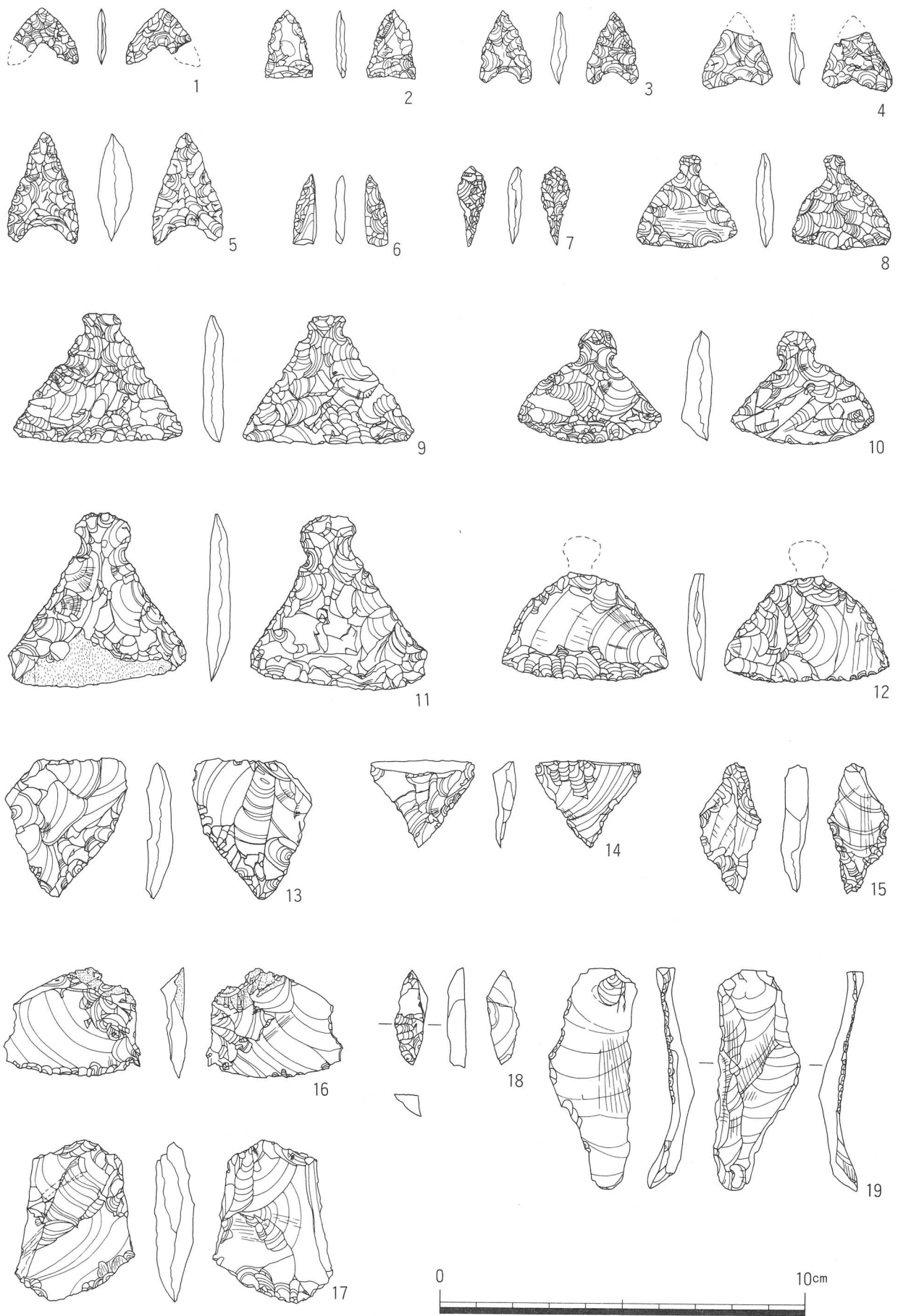
二次加工のある剥片（第13図13・15・18・19）黒曜石製・珪化凝灰岩製・鉄石英製・玉髓製のものがある。19は、黒曜石の縦長剥片の両側縁に歯つぶし状の加工を施したものである。珪化凝灰岩製の剥片の中には、先土器時代に遡る可能性のあるものもある。

磨製石斧（第14図）30点の完成品と2点の未製品がある。完成品は、刃部又は基部を欠損するものがほとんどで、完形品は2点にすぎない。石材は主に蛇紋岩で、他に砂岩(14)、凝灰岩と思われるもの(4・22)がある。形態はいわゆる定角式で、特異な例としては、11・19が乳棒状と言えようか。刃部の残存するものは9点あるが、大半が両刃の蛤刃で、1・11が片刃状である。特色としては、刃部を使用によって欠損したものを再利用していることである。基部に刃部を作り出しているもの(3・22)、破損部を再敲打して刃部を作り出すもの(4)、基部端に敲打痕を有するもの(5・11・12・17・19・20)、破損部に敲打痕を有するもの(15)、側縁に敲打痕を有するもの(16・18)がある。又、26の側縁には、擦切技法の痕跡が認められる。27・28は未製品。27は側縁に細かい敲打痕が認められる。28は蛇紋岩製で、荒い剝離調整を施した上、一部に研磨面が見られる。

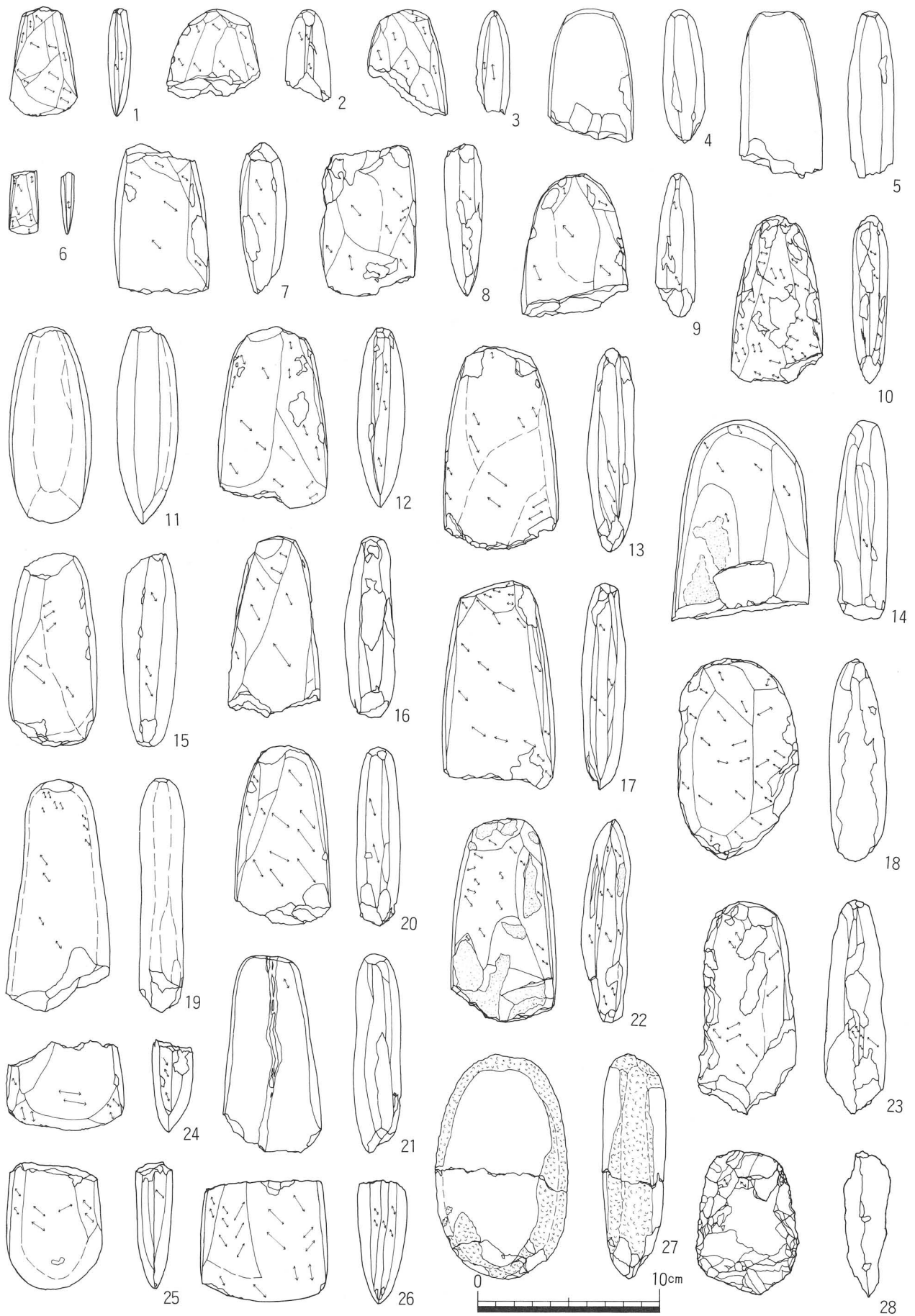
打製石斧（第15図）形態的には、側縁の形状が末広がりとなるもの(1～4・8)、直線的なもの(6・11・13)、両側縁に抉りの存在するもの(5・7・9・10・14)に分けられる。主に、礫を打ち割った薄手の縦長剥片を利用するが、16のみは横長剥片である。5は刃部側に打点をもつ例である。一次剝離面は最大限に利用され、主に側縁を剝離・敲打整形し、背面には自然面を残すものが多い。13は、全体に厚手で、基部端・片側側縁に広く敲打痕が見られる。

凹石・擦石・敲石（第16、17図1～12）これらの内、1つの機能のみを有するものは少ない。凹石と分類したものは、片面或いは両面に1・2個の凹みのあるもので、その内、側縁に敲打痕をもつものは25点ある。第16図17は、側縁に擦面をもつ。擦石と分類したものは、円礫の平面を利用するもの、円礫の側縁を利用するもの、断面三角形の礫の一側縁を利用するものに分けられ、平面・側縁に敲打痕をもつものがある。敲石は、上下端・側縁・平面に痕打痕を有するものがある。

砥石・石皿（第17図13～15）砥石としたものは7点あるが、14は石皿の可能性もあり得よう。石材は砂岩。石皿と扱ったものは、残存長30cm、最大幅37.5cmの石塊で、表面が縁を残して中央が弓状に凹んでいる。（北川）



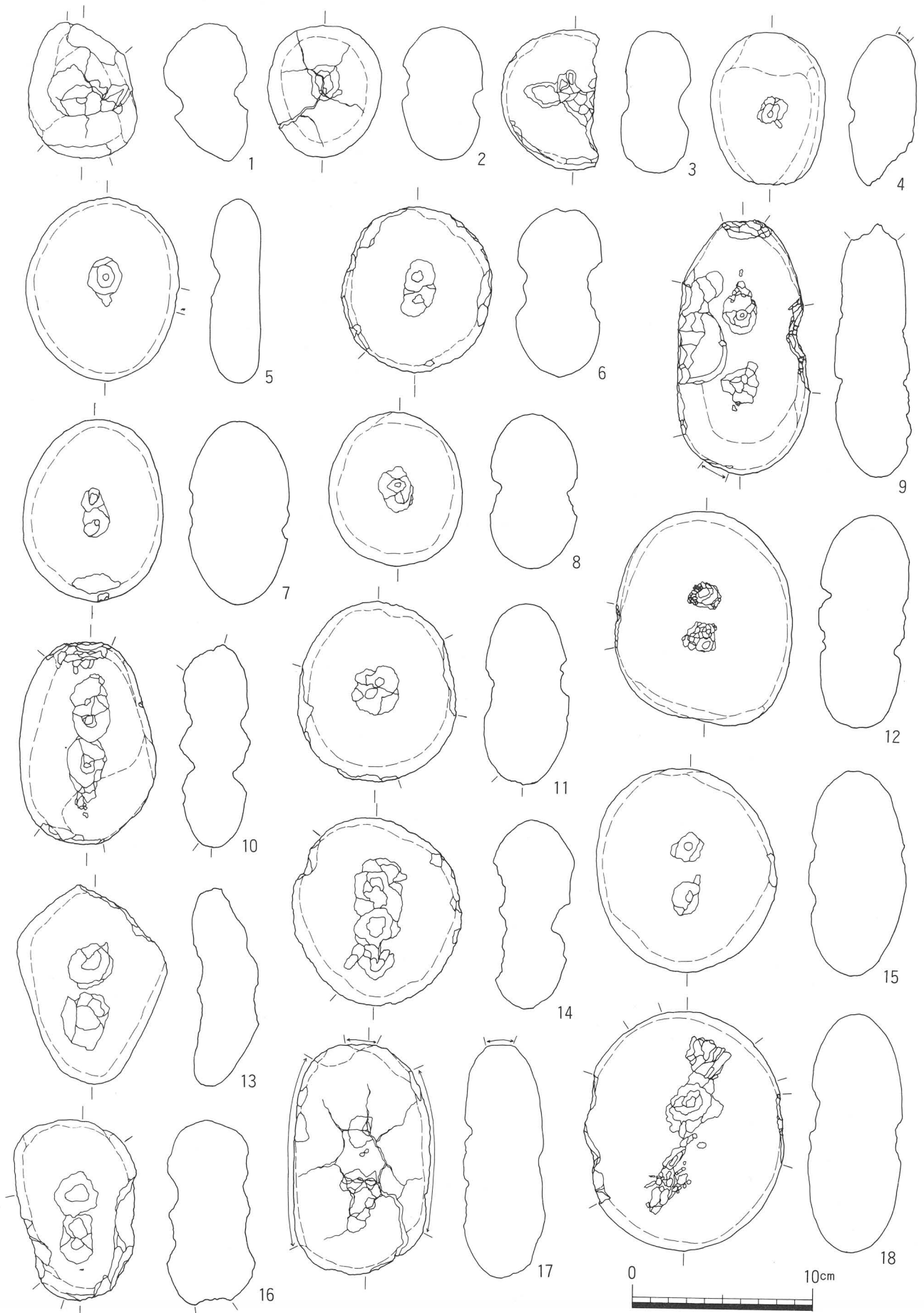
第13図 遺物実測図 6・8・18. 第1号住居跡 5・7・9~11・14・16・17. 包含層 2・3. 表採 その他. 盛土層



第14図 遺物実測図 1・3・6・9・11・14~16・19・21・27・28. 包含層 その他, 盛土層



第15図 遺物実測図 1・6・7・8・11・14. 包含層 その他, 盛土層



第16図 遺物実測図 2・10・13・18. 包含層 その他. 盛土層



第17図 遺物実測図 15. 第2号住居跡 2・3・5・8・10・13・14, 包含層 その他, 盛土層

IV まとめ

前章までに述べた点と問題点を要約し、まとめとする。

1. 吉峰遺跡は、常願寺川によって形成された高位河岸段丘上に立地する。その所属時代は、先土器時代に始まり断続的にはあるが、縄文時代晩期にまでおよぶ長期間にわたる。なお、今回の調査では平安時代に属する遺構と遺物が少量ながら検出されており、同時代にも遺跡が営まれた可能性が考えられる。
2. 当遺跡では、土取り事業を契機として過去5回の調査が実施されており、今回は第6次調査にあたる。
3. 今回の調査区域は、丘陵北西縁辺部で、遺跡の北西端にあたる。
4. 遺構は、竪穴住居跡2棟、穴255を検出した。

住居跡は縄文時代前期中葉に属するもので、いずれも南側隅に住居跡に接して貯蔵穴と思われる穴を付設している。第1号住居跡は、長軸約7.6m、短軸約6.8mの不整円形プランを有し、同時期の他の住居に比べて著しく大型である。第2号住居跡は、長軸約4.1m、短軸約3.2mの不整円形プランを有する。支柱は、第1号住居跡が9本、第2号住居跡が5本で、棟木支えの形はいずれもXY型である。

穴は、遺物の出土したものは18個にすぎないが、次の2群に分けられる。第1群は縄文時代前期に属するもので、播鉢状・円形・袋状をなし、調査区中央に位置する。第2群は平安時代に属するもので、炭化物・焼土を多く含み、調査区北半に分布する。

5. 遺物は、遺構等から良好な状態で出土したものは少なく、大部分が遺物包含層・盛土からの出土である。

土器は、縄文時代早期末～晩期・平安時代のものが出土しているが、量的には縄文時代前期中～後葉のものが大半を占める。中でも特徴的なのは、前期中葉に属するもので、諸磯式・北白川下層式など周辺諸地域の型式の影響を強く受けた土器で構成されている。これは、真脇遺跡の報告書で述べているように、^{註14}『…むしろ東西の文化要素を見事に使い分け一つの文化に統合昇華した現象こそ、現代にも通ずる北陸の特色と評価すべき…』と解すべきであろう。

石器は、蛇紋岩系の石材による磨製石斧が最も多く、多量の打製石斧・凹石・擦石・敲石、少量の石鎌・石匙・石錐・削器・石皿からなる組成をもつ。このような石器組成の傾向は、第1～5次までの発掘調査においても概略共通するもので、県内の同時期の遺跡では^{註15}極楽寺遺跡に近く、^{註16}南太閤山I遺跡とは大きく異なっている。これは立地等の違いによる生業形態の差異に原因するものと考えられ、その究明は今後の課題である。

註

- 註1 安田良栄 1977 「郷土のあけぼの」『立山町史』上巻
- 註2 橋本 正 1974 「III 1. 住居について」『富山県小杉町水上谷遺跡緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
- 註3 安田良栄 1965 「吉峰の瓦器出土遺跡について」『立山の文化』第4号
- 註4 神保孝造 1975 「III 2. 遺構」『富山県立山町吉峰遺跡第4次緊急発掘調査概報』富山県教育委員会
- 註5 網谷克彦 1982 「北白川下層式土器」『縄文文化の研究3』 雄山閣
- 註6 奈良大学助教授泉拓良氏の御教示による。
- 註7 柳井 陸 1975 「III 3(2)a. 土器」『富山県立山町吉峰遺跡第4次緊急発掘調査概報』富山県教育委員会
- 註8 『第4次緊急発掘調査概報』(前記)では「口唇部に細い粘土紐を波状に付す」とされているものに当る。
- 註9 小島俊彰 1986 「第6章第1節6 第6群土器 真脇式期」『石川県能都町真脇遺跡』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団

- 註10 小島俊彰 1975 「本江遺跡」『滑川市史』考古資料編 滑川市史編さん委員会
- 註11 鈴木道之助 1983 「石鏃」『縄文文化の研究7』雄山閣
- 註12 以下、石器の形態・石質などについては、富山県埋蔵文化財センター職員山本正敏氏の御教示を得た。
- 註13 岡村道雄 1983 「ピエス・エスキーユ、楔形石器」『縄文文化の研究7』雄山閣
- 註14 四柳嘉章 1986 「第6章第1節3 第3群土器 福浦下層式期」『石川県能都町真脇遺跡』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団
- 註15 小島俊彰 1965 『極楽寺遺跡発掘調査報告書』富山県教育委員会
- 註16 山本正敏 1986 「IV 調査の成果」『都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要(4) 南太閤山I遺跡』富山県教育委員会

参 考 文 献

- ア 安達厚三 1983 「石皿」『縄文文化の研究7』雄山閣
網谷克彦 1982 「北白川下層式土器」『縄文文化の研究3』雄山閣
- イ 今村啓爾 1982 「諸磯式土器」『縄文文化の研究3』雄山閣
- ウ 梅原末治 1935 「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第16冊
- オ 岡村道雄 1983 「ピエス・エスキーユ、楔形石器」『縄文文化の研究7』雄山閣
- キ 岸本雅敏・山本正敏 1986 『都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要(4) 南太閤山I遺跡』富山県教育委員会
- コ 小島俊彰 1965 『極楽寺遺跡発掘調査報告書』富山県教育委員会
小島俊彰 1974 『富山県立山町吉峰遺跡第3次発掘調査概報』富山県教育委員会
小島俊彰 1979 「本江遺跡」『滑川市史』考古資料編 滑川市史編さん委員会
小島俊彰 1981 「井口式土器」『縄文文化の研究4』雄山閣
- サ 酒井重洋・神保孝造・奥村吉信 1981 「III 吉峰遺跡」『富山県立山町埋蔵文化財緊急発掘調査概要 白岩菽ノ上遺跡 吉峰遺跡』立山町教育委員会
- ス 鈴木次郎 1983 「打製石斧」『縄文文化の研究7』雄山閣
鈴木道之介 1983 「石鏃」『縄文文化の研究7』雄山閣
- タ 立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1987 『立山町埋蔵文化財分布調査報告II』
- ハ 橋本 正 1970 『立山町吉峰遺跡発掘調査報告書』富山県教育委員会
橋本 正 1972 「第II部立山町吉峰遺跡・第V部縄文時代前期の諸問題」『富山県埋蔵文化財調査報告書II』富山県教育委員会
橋本 正 1972 「三、縄文早・前期」『富山県史』考古編
橋本 正・神保孝造 1974 『富山県小杉町水上谷遺跡緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
橋本 正・酒井重洋・久々忠義 1980 『富山県井口村井口遺跡発掘調査概要』井口村教育委員会
- ミ 三浦和信 1987 「第五章第三節三. 石器」『房総考古学ライブラリー3 縄文時代(2)』(財)千葉県文化財センター
- ヤ 安田良栄 1977 「郷土のあけぼの」『立山町史』上巻
柳井 睦・神保孝造 1975 『富山県立山町吉峰遺跡第4次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
- ヨ 四柳嘉章・越坂一也・小島俊彰・加藤三千雄 1986 「第6章第1節1 第1群土器 佐波式・極楽寺式期～8第8群土器 新保式期」『石川県能都町真脇遺跡』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団



岩峠野遺跡

吉峰遺跡

末谷口遺跡

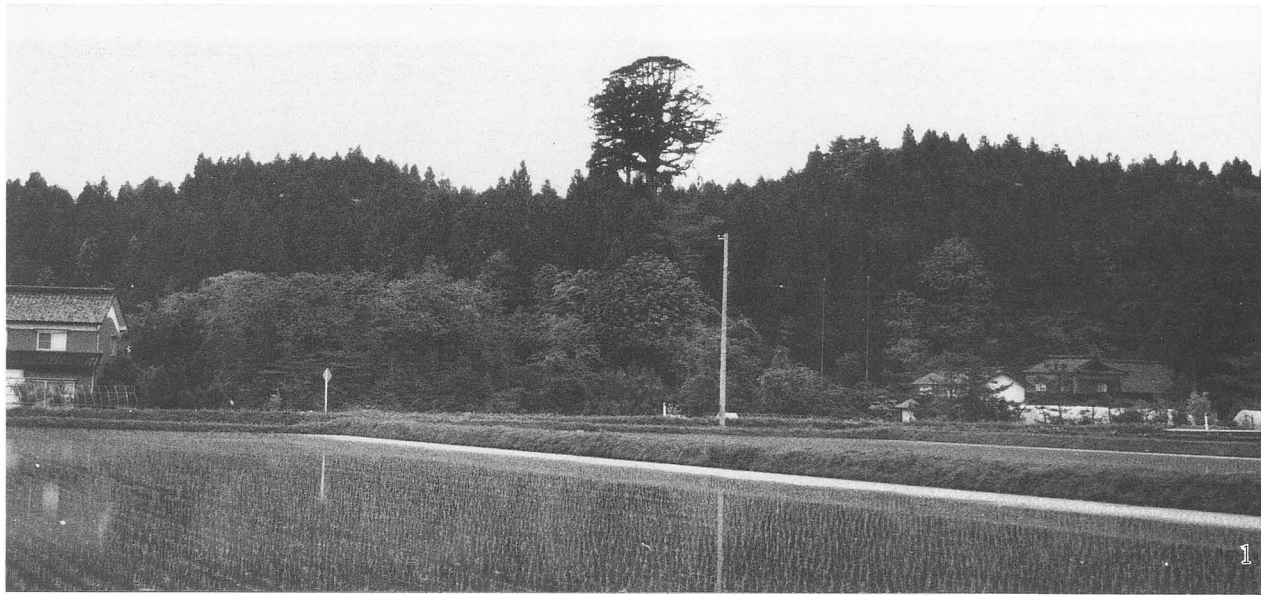
天林北遺跡



図版 3

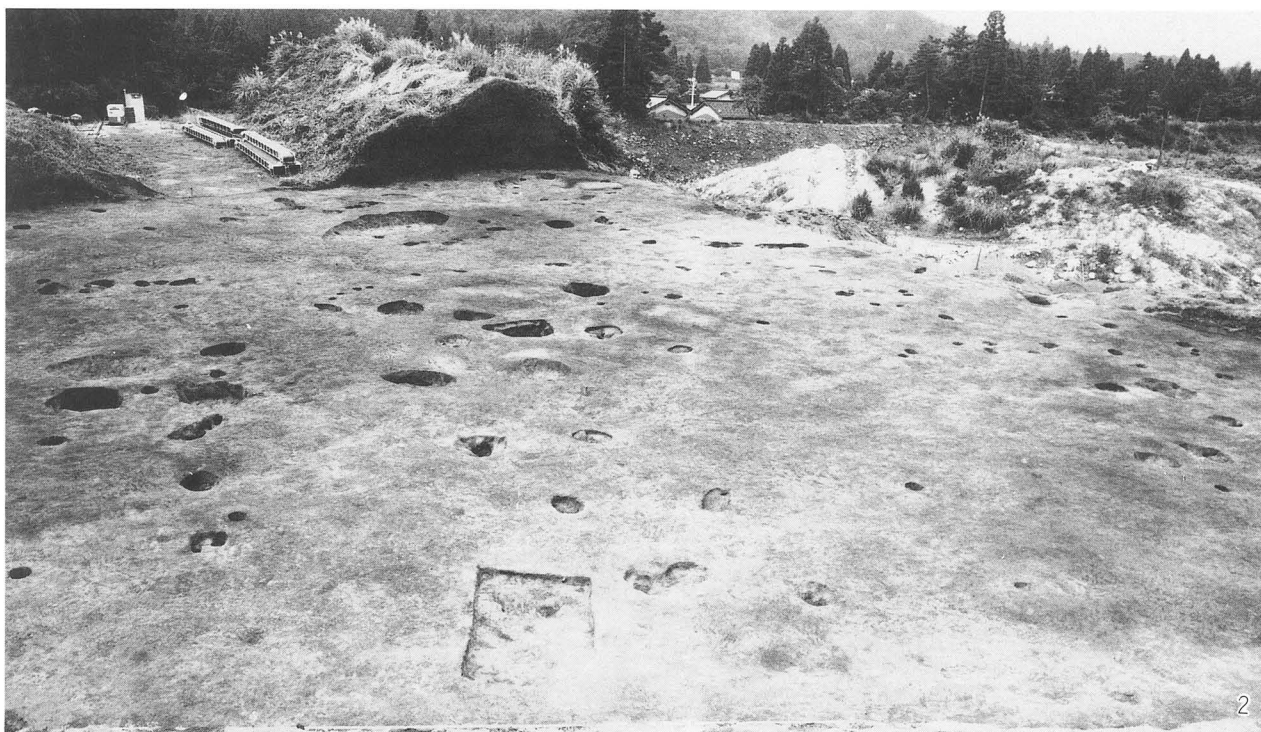
1. 遺跡遠景

(西から)



2. 発掘区南側全景

(西から)



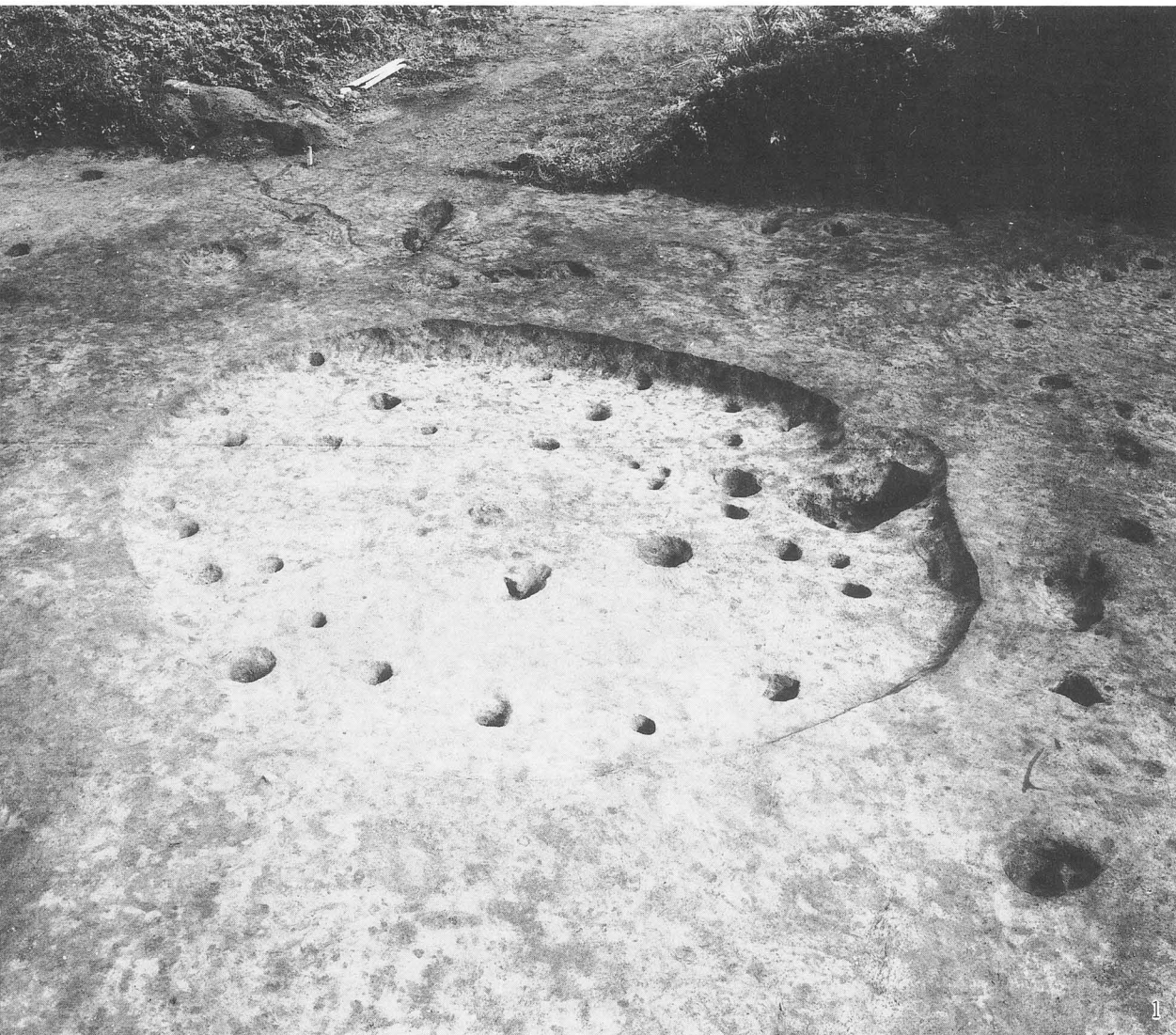
3. 発掘区北側全景

(西から)

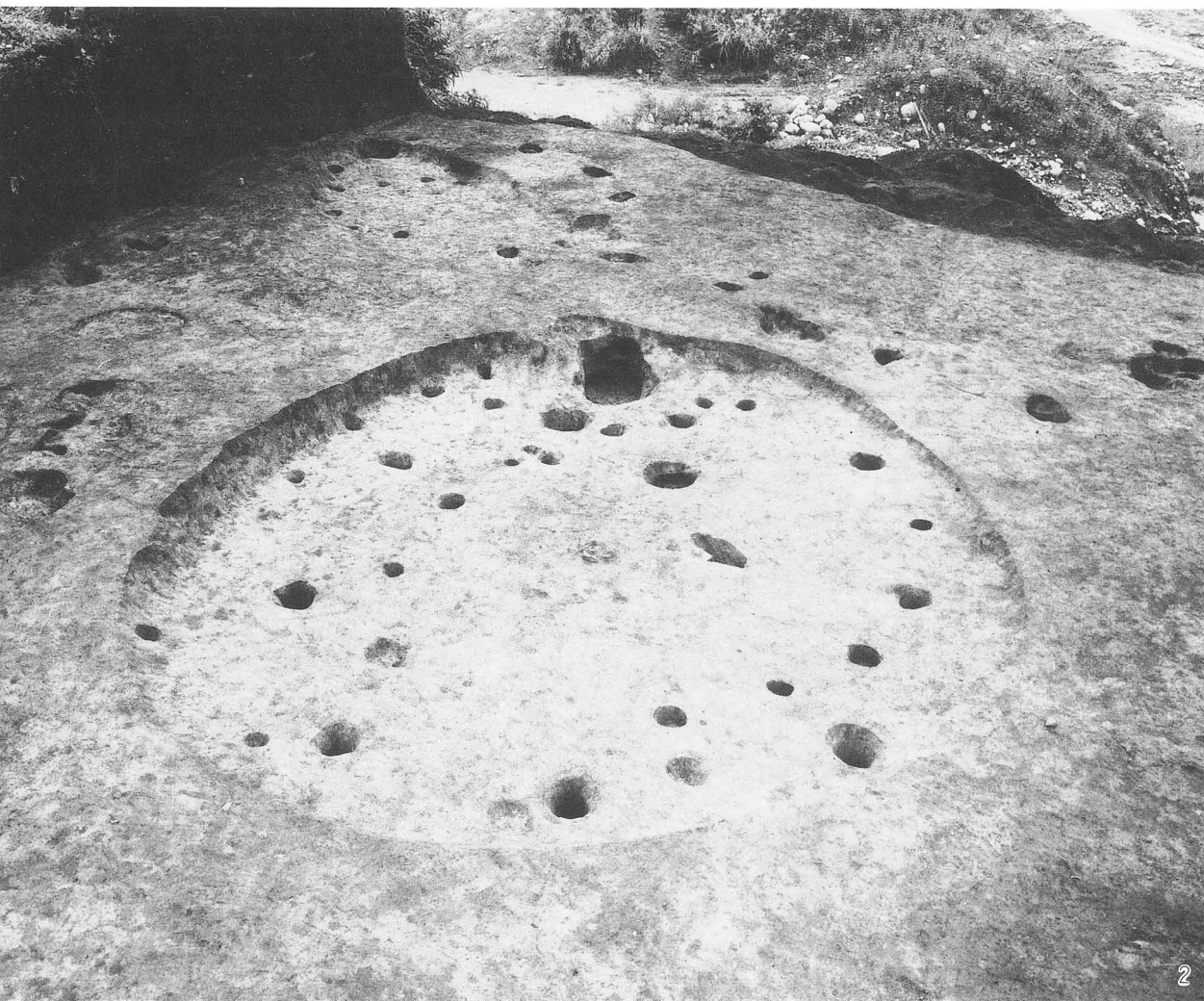


図版 4

1. 第1号住居跡
(西から)



2. 第1号住居跡
(北から)

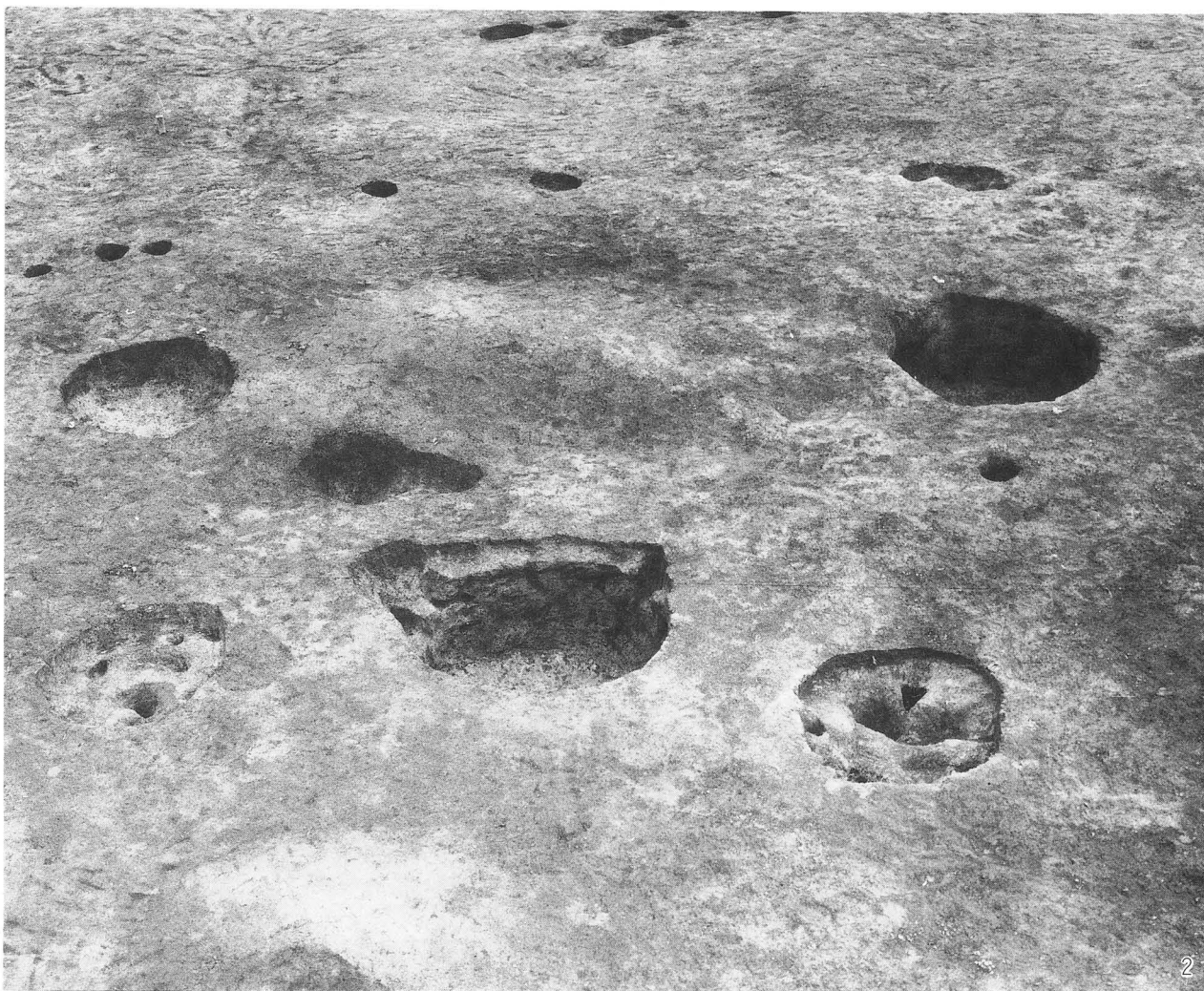


図版 5

1. 第2号住居跡
(東から)



2. 発掘区中央穴群
(西から)

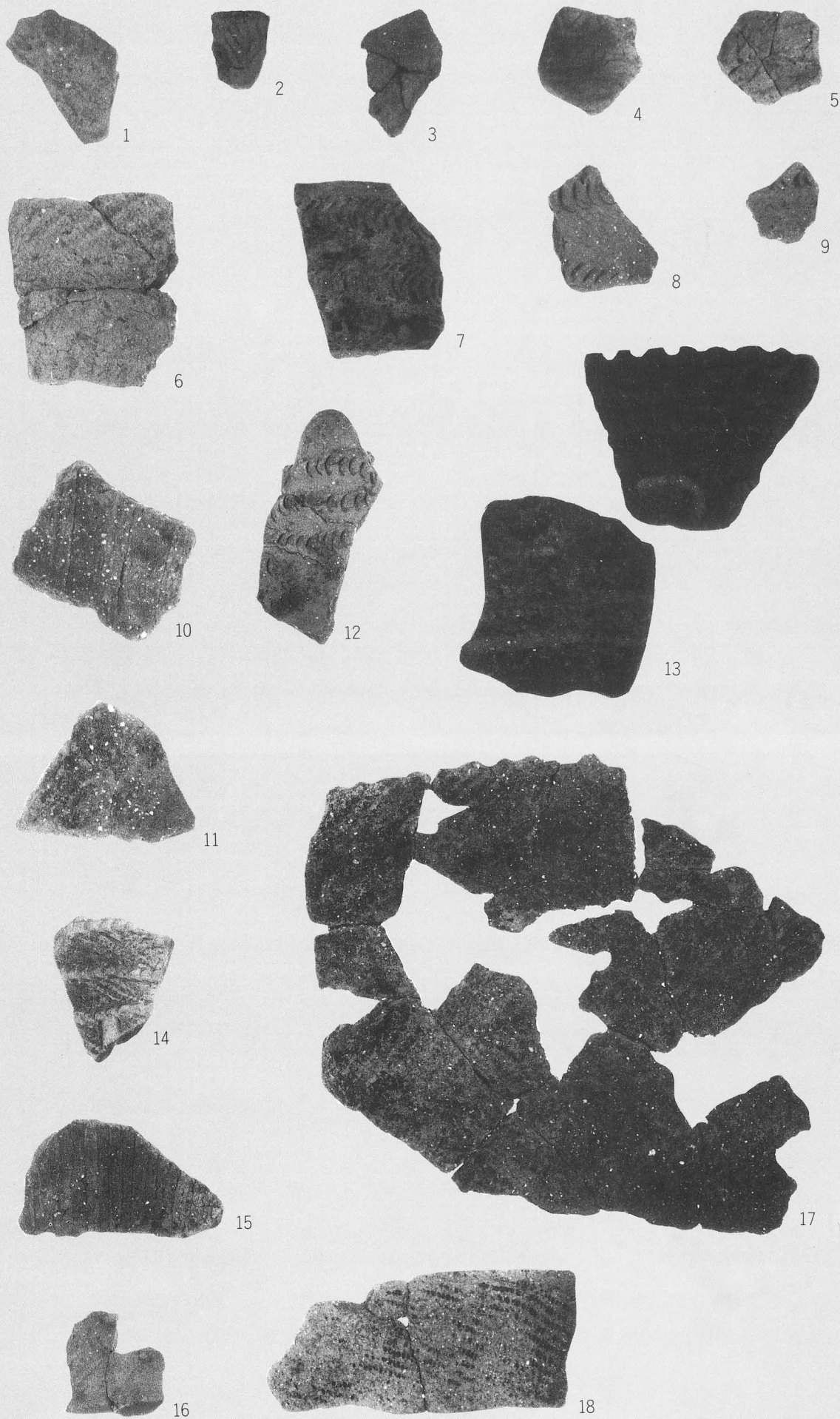


图版 6

1~8 · 10 · 12~14 ·

16~18.

第 1 号住居跡



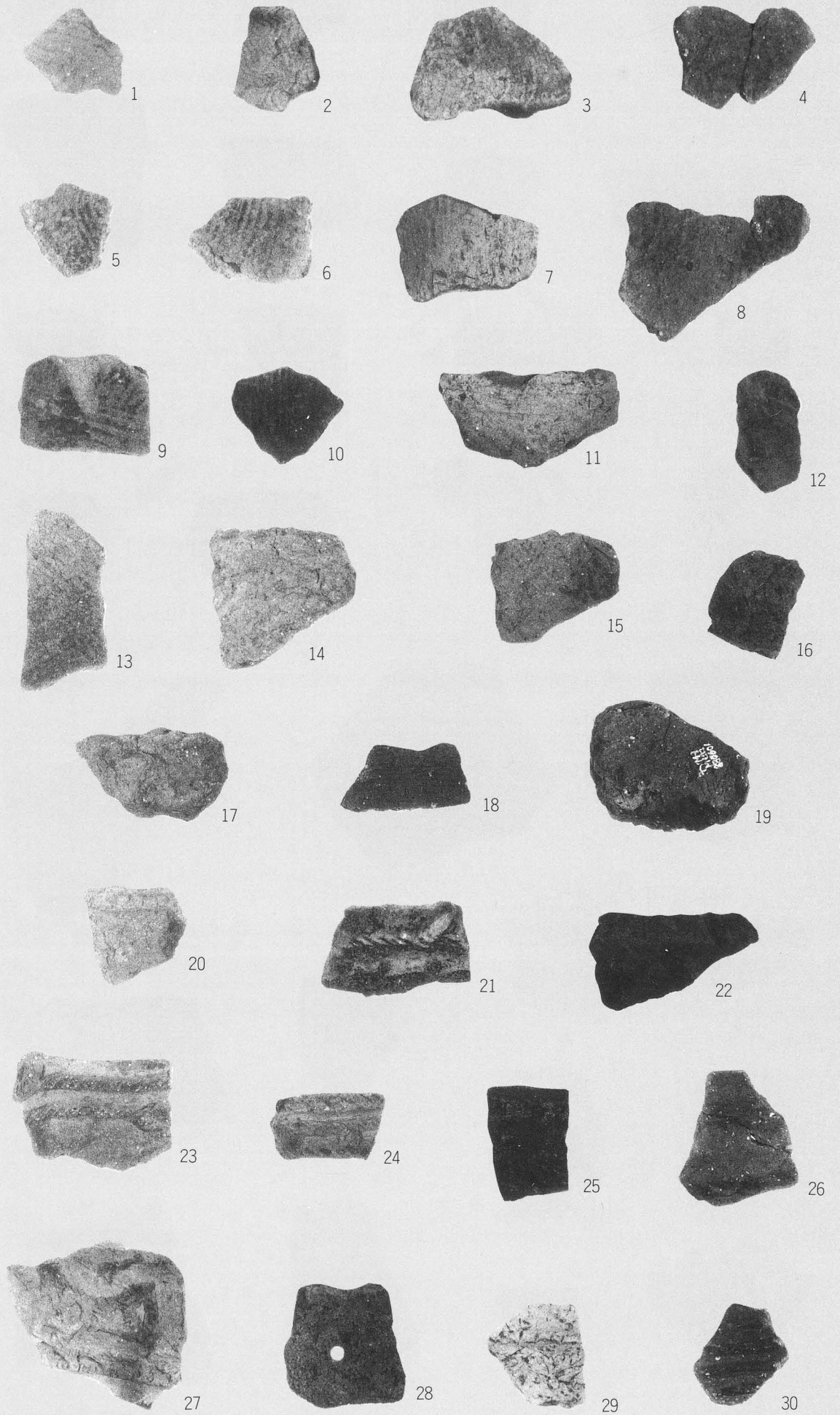
9 · 11 · 15.

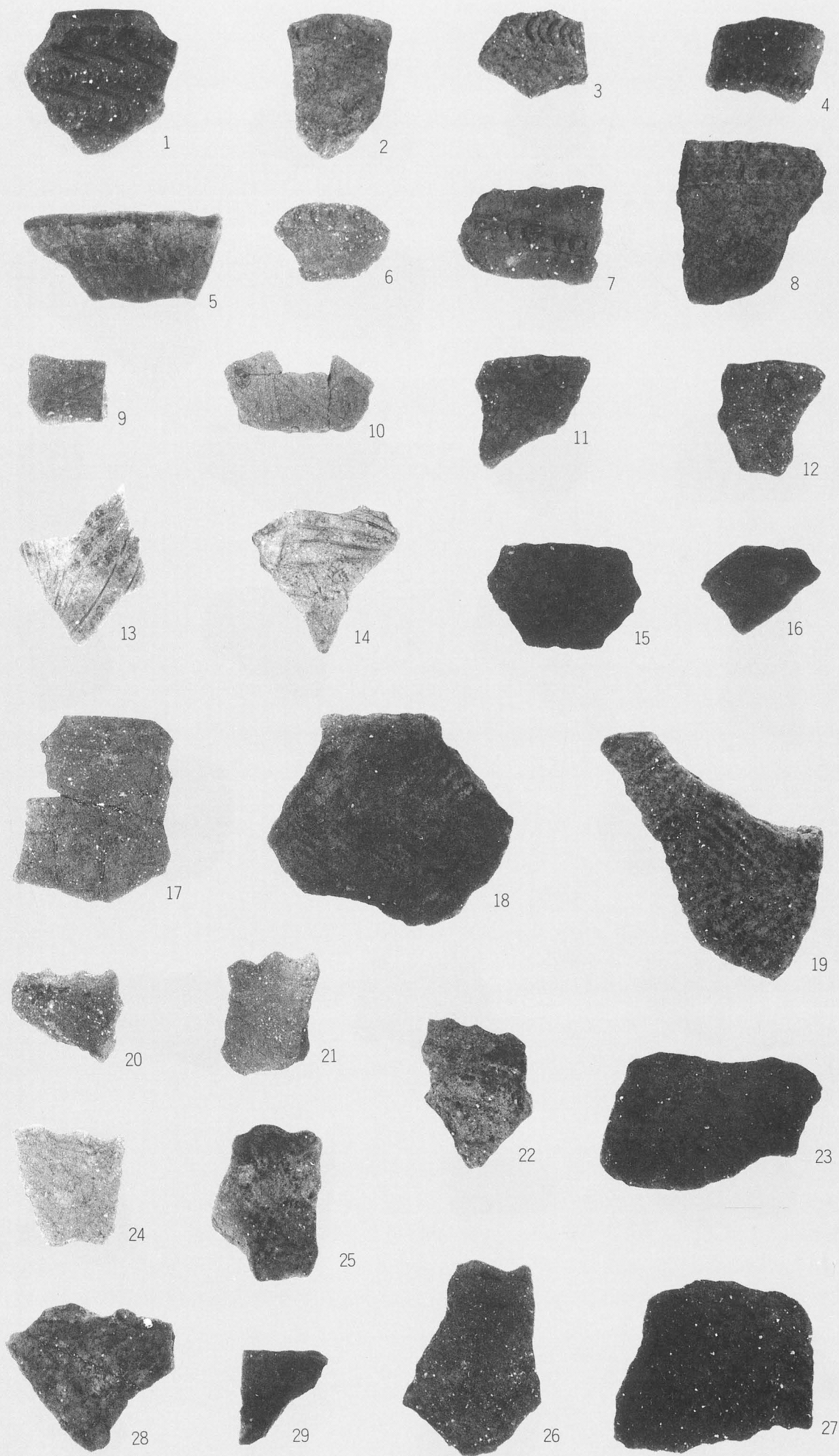
第 2 号住居跡

図版 7

4. 第1号住居跡

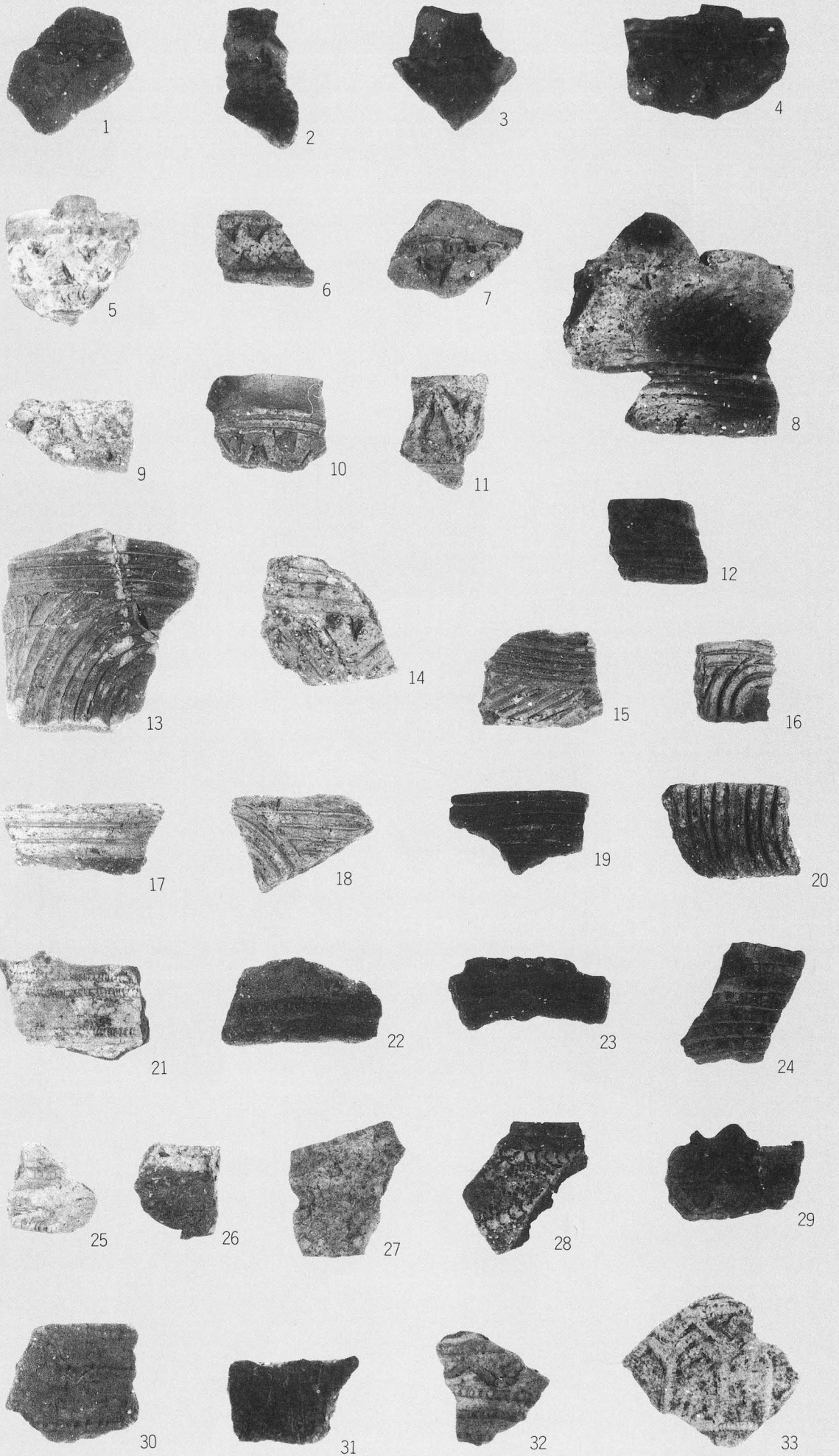
その他、包含層・
盛土層

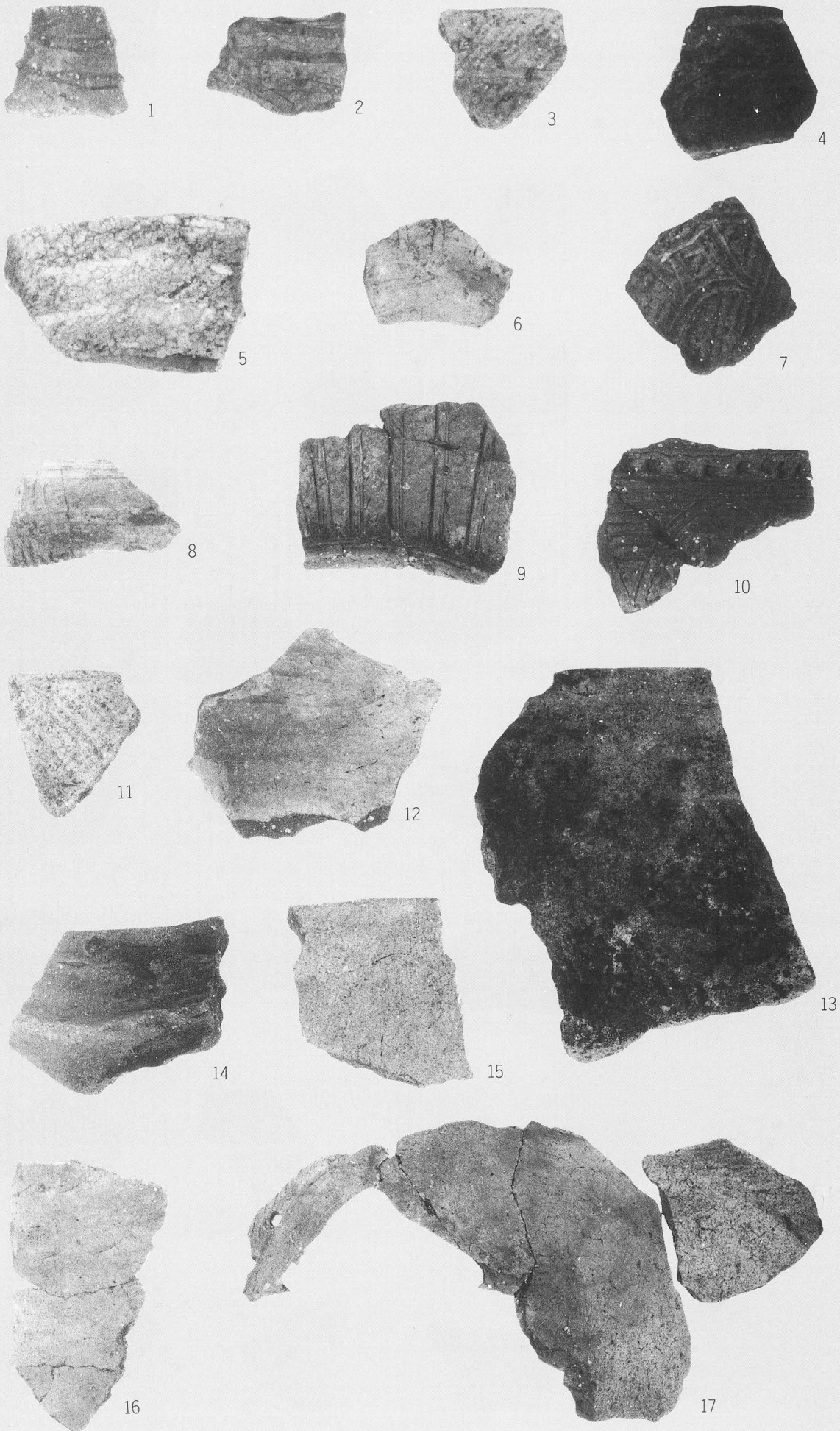




図版 9

包含層・盛土層



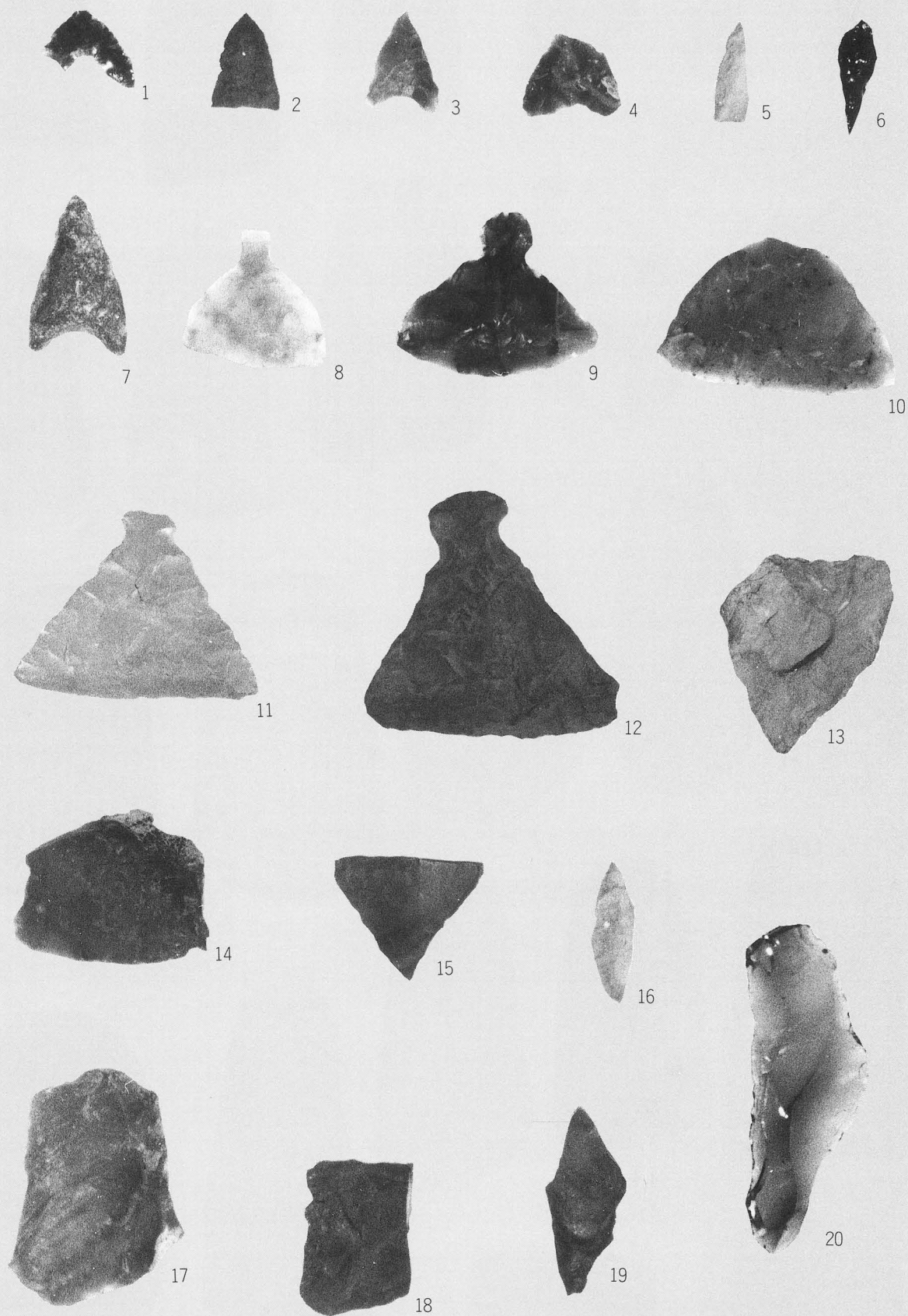


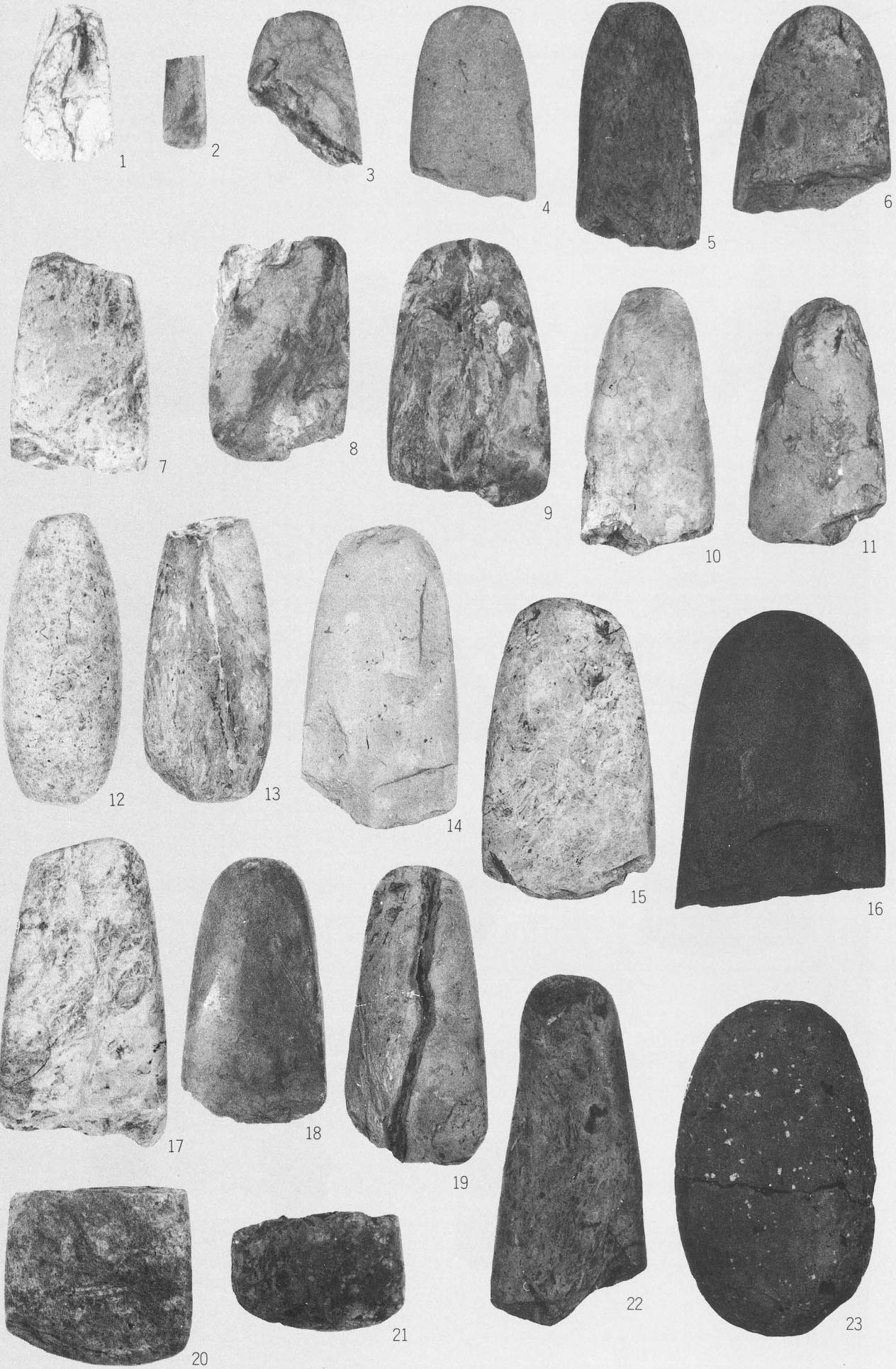
図版11

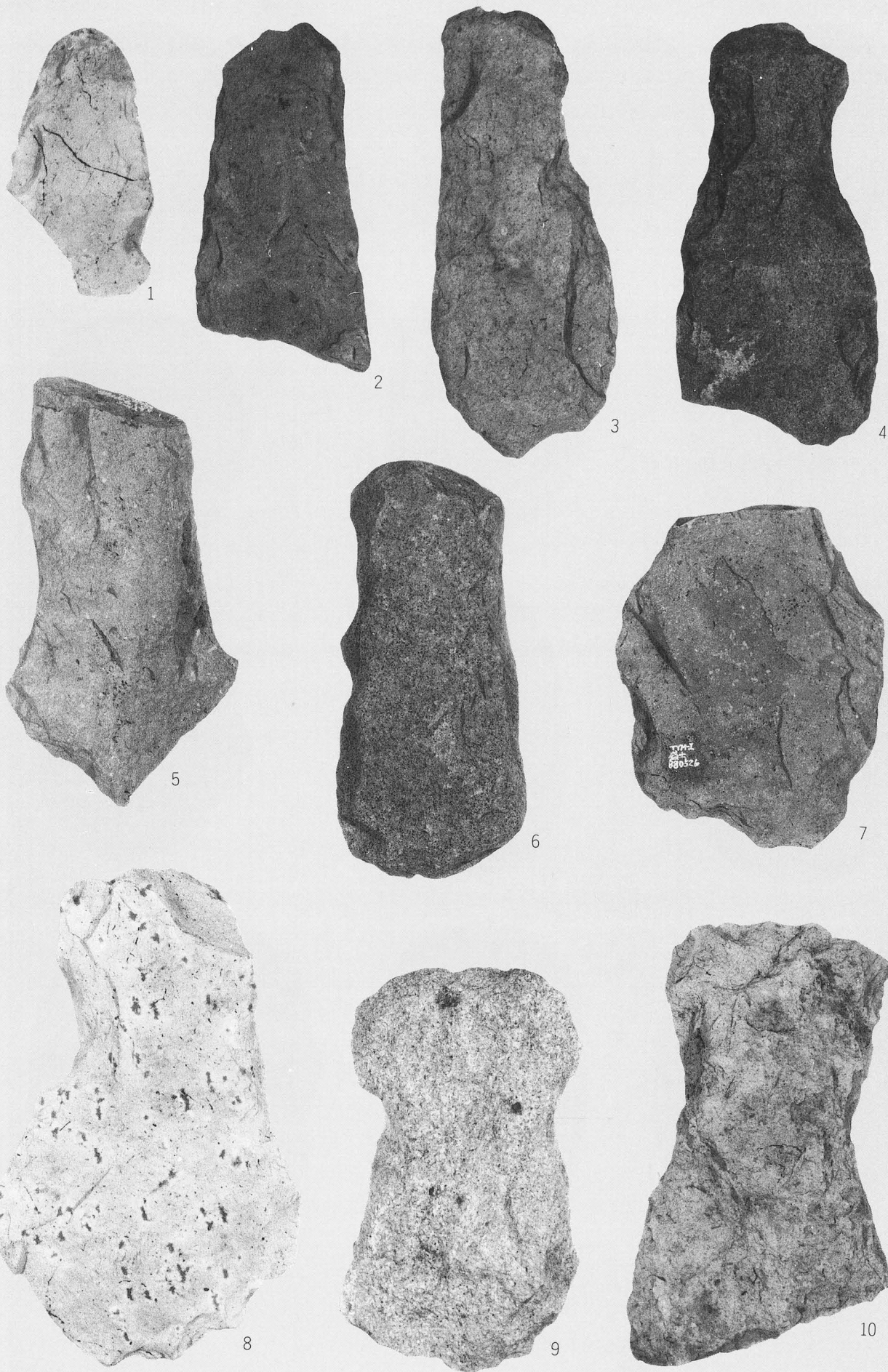
5・8・16.

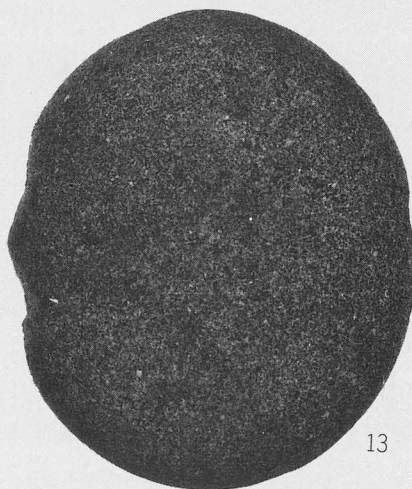
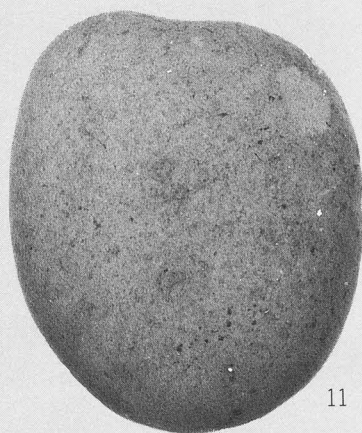
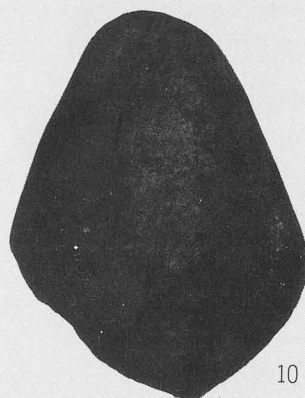
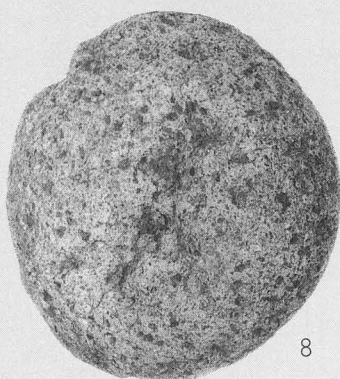
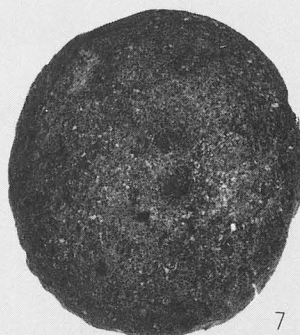
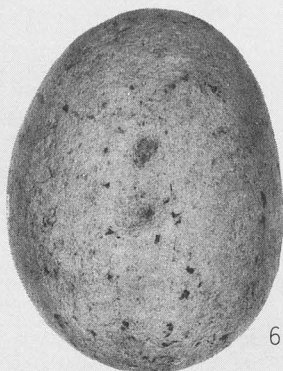
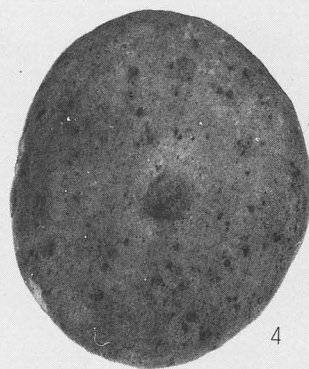
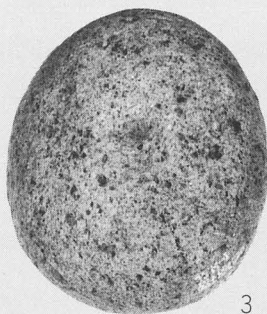
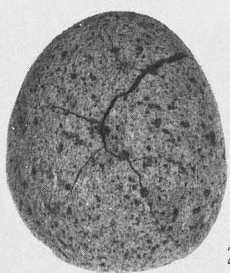
第1号住居跡

その他、包含層・
盛土層





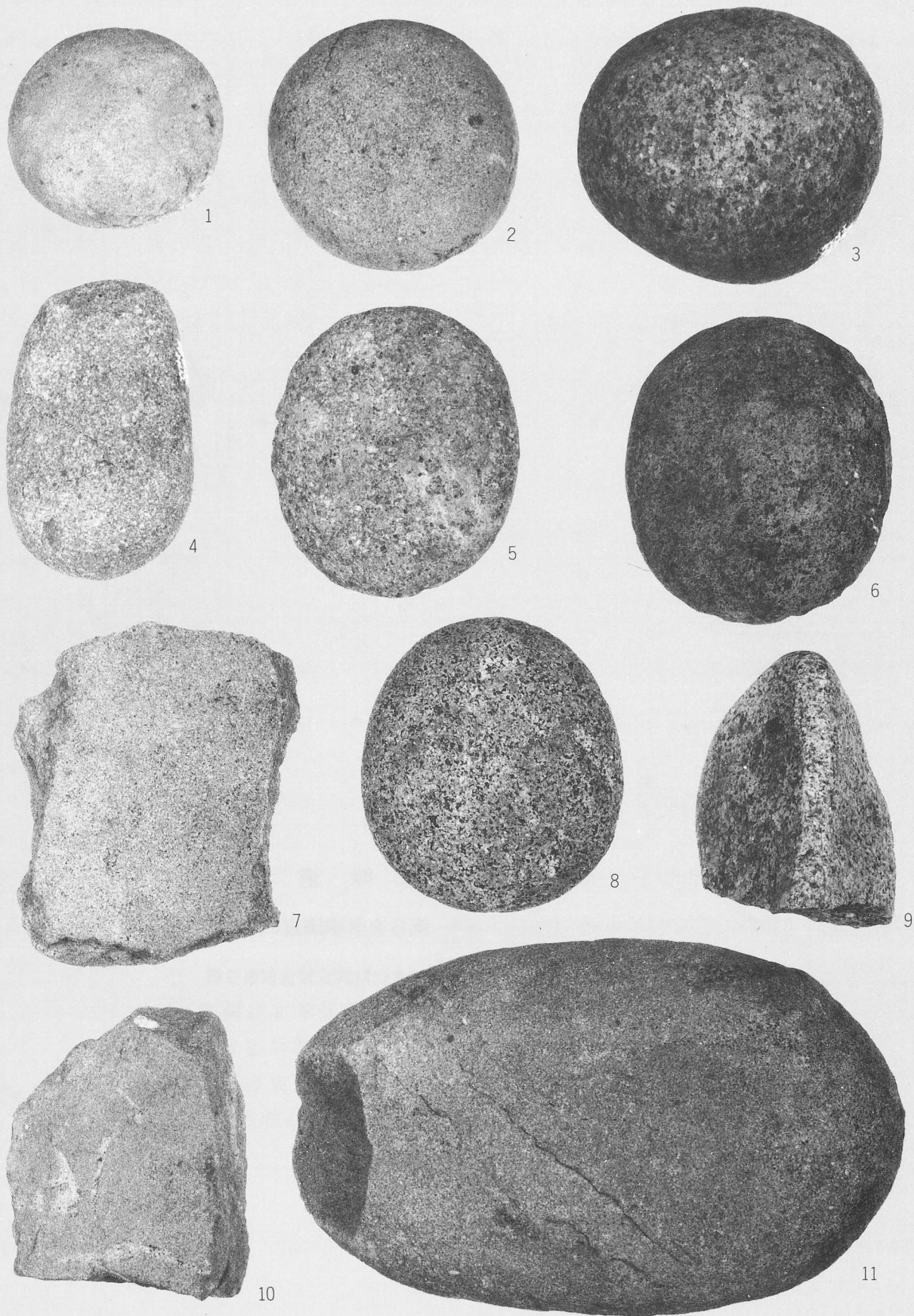




図版15

11. 第2号住居跡

その他. 包含層
盛土層



吉 峰 遺 跡

——第6次発掘調査概要——

立山町文化財調査報告書第9冊

発行日 平成元年3月31日

編 集 立山町教育委員会

発 行 立山町教育委員会

印 刷 富山スガキ株式会社

